オモイビト

杉本秀昭

この作品は、株式会社テクモから販売された『零（ゼロ）紅い蝶（ト）』の人物・世界設定を
使用しています。

作中に登場する団体・人物の名称は、全て架空のものです。

また、内容に一部の表現が含まれますので、十八歳未満の方の閲覧は禁止させて
いただきます。

目次

オモイビト	五
昏　　～たそがれ～	十九
紅い夢の夜	二五
常　　～にちじょう～	五一
頬　　～ほお～	五九
漏　　～おもらし～	六三
あとがき	七二

カバー・本文イラスト
杉本秀昭

オモイビト

私は、妹の漣が好き。

私は、漣のことが大好き。

双子の妹のことが大好き。

漣が大好き。

……けれど、漣は、私と同じ気持ちでいてくれているのだろうか？

人は一人では生きていけない、と誰かが言っていた。

それは半分本当のことで、半分は嘘。

私は漣に、いつも私だけのことを見ていて欲しいと思っ
ている。私がいつも漣のことだけを考えているのと同じように、
漣にも私のことだけを求めて欲しいと思っ

ている。
私たちは元はたった一つだった。お母さんのお腹の中で、
一つだったものが二つに別れてしまった双子だから。同じ顔、
同じ身体、同じ遺伝子を持って産まれてきた。けれど、心は
同じではなくなってしまうた、魂も二つに分かたれてしまった。
二つのものは惹きあうことはあっても、もう二度と一つに戻
ることはできない。

私たちは結局、同じ場所、同じ時に産まれることができても、
生きる場所も、生きる時間も、そして死ぬ時も、もうずっと
一緒にはいられないのだから。私たちは、双子という他人同
士に過ぎないのだから。

……でも、そんなのイヤ。

漣と一つになるなんてことは出来ない相談だったこと、そ

んなことはわかっている。ずっと一緒にいられないこともわ
かっている。きっとそのうちに漣にも恋人が出来て、結婚して、
そうして年老いて死んでいく……私とは無関係に。

そんなの、許せない。

私は漣と一緒にいたい。ずっと一緒に。

たとえ一つにいらなくなったら、一つのように寄り添って
生きていきたい。恋人なんかいらぬ、結婚なんて許さない。
漣は私と一緒に生きて、暮らしていけばいい。そして仲良く
年を取って死んでいく。子供なんていらぬ。私と漣の間は
他の存在なんてあつて欲しくない。ただ二人一緒に死んで
いきたい。静かに、ただお互いのことだけを思いあつて生きて
そうして死んでいけたなら。

私はただ漣だけが欲しい。他には何もいらぬ。

漣、漣、漣。

私だけの、漣。

だけど……漣は、きっとそんな風には思ってくれてない。
私と同じ想いではいってくれない。

それが、私には悲しくて。

悲しくて、かなしくて、かなしくて。

切なくて、せつなくて。

そんなこと、私は……許せない。

S

「さよなら」

「じゃあね」

教室の中に広がる、慌ただしい放課後の喧噪
さよなら、またね、あそびに行こうよ、早くクラブに行かないと。

友達同士での楽しいおしゃべりの声、友達にかける声、呼びにきた声、応える声、いろんな声で教室が満たされる。椅子を引く音、靴音、ガタガタ、ドアを開ける音、いろんな音、私の周りをいろんな声と音がただ通り過ぎて行く。

そんな中を、私は今日も一人で待っている。
鞆の中を確認して、横につけた小さなマスコットを弄びながら、時たま私にかけられる「さよなら」の声に返事しながら。

窓の外を見ると、この季節ならばまだまだ日は高い。じつとりとした初夏の暑さが、まるで空の青さと反比例するかのようにな不快な気分を増ししていく。校庭から聞こえてくる蝉の声やクラブに出ている生徒達の声が重なって、少しづつ少しづつ大きくなって、私の周りにまとわりついてくる。

夏に向かうこの季節は嫌い。じめじめくじくじとした何かぬめっとしたなにかが周りに中をはいりまわっているような気がして。生きているもの、動物、植物、犬、猫、鳥、人間の中に、ちよっとした傷口から小さな虫や軟体動物が入り込んできて、どろどろとしたもので内側から腐らせ自分自身も死んで腐りながら何かベツモノに変えていってしまうような、そんなイメージがあるから。

私は無意識のうちに、右膝に巻かれた包帯をそっとなぞっていた。

オモイビト
この白い包帯の下に隠されて、醜くひきつれた今も消えない痕がある。小さい頃の怪我の痕、ここから何か私の中に入ってきて、私を太陽と夏を倦む何かへと変えてしまったの

かもしれないと、そしてこの傷からは今も何かが入り込んできているような、そんな不快な妄想に遊ぶ。
「きもちわるい」

ボソッと、誰にも聞こえないような声で呟く。

教室の中には、私を除いて四、五人がまだ残っている。

私が残っている人はまだ来ない。

うそ臭いほどに明るく強く、押し付けがましい太陽の光が苛立たい。

小さく頭を振る。下を向いて、鞆につけた紅い蝶のマスコットを指で遊びながら、雑音は聞こえないふりをして廊下の方の音だけに耳を澄ませる。

不快な音、音、音、ざわめき。私には必要のない音ばかり。私が残っているのはこんな音じゃない。早く来て欲しい、私に必要な私の為だけのたった一つの足音、そして声。

それは、私の妹の

「お姉ちゃん」

「溼」

そうして、私の待ち人がやってきた。

S

けれど結局、今日私はいつものように溼と一緒にではなく、一人で帰ることになった。

それは溼が友達からの誘いを断りきれなかったため。

「ほんとにごめんね、お姉ちゃん」

オモイビト

「いいよ、気にしないで」

「うん……でも、ごめんね」

私は澗に笑顔返す。

「じゃ、いつてらっしゃい」

「うん、そんなに遅くならないと思うから」

そう言つて、私を残して教室から出ていく妹を見送る。

窓の向こうでもう一度こちらを見て手を振る姿に、私も笑顔で同じように手を振り返す。

走り去った妹の姿が完全に消えてから、ふうと溜息をついた。

「最近……こついうこと多くなつた、かな」

私はのろのと椅子から立ち上がると、鞆を持って教室を出る。

もう人が少なくなつた廊下をぼんやりしながら歩いていく。澗を待っている間は気になつて仕方が無かつたつるさい雑音は、何故か今はまったく気にならなくなつていた。

階段を下りて下駄箱へ。靴を出して、上履きを戻して。

いつもなら澗が隣にいてくれるのに、今日は一人だけ。

トントンと靴を慣らして顔を上げると、下駄箱独特のむつとした空気の向こう側、玄関先は初夏の日差しで真っ白に見えた。

(……お姉ちゃん)

いつものように私に向かって差し出された澗の手……は今日は無く、だから、その光は私を拒絶しているかのようにしか感じられなかつた。

ただ一人で、学校を出て通学路を歩く。

太陽に焼かれたアスファルトの上を、少し調子の悪い機械のように家に向かつて足を運ぶだけ。

その道すがら、私が考えていたのは澗のことだった。

澗には澗の友達がいてつき合いがあるのだから仕方無いといふことはわかっている。

けれど、寂しい。

寂しくて、少し悲しい。

けれど、仕方無い。

仕方無いことだから。

私が寂しいと思つても、それはつまらない感傷に過ぎないと言われるのだと思ふ。

どちらかと言えば、今でも姉妹揃つて登下校することが多い方が珍しいと言われることの方が多いくらい。そしてそれは正しいことなのだと思ふ。私が澗に依存しているのは、誰の眼から見ても「べつたりしすぎ」と評されるぐらいなのだから。

双子だから、というのは一緒でいることの理由にはならない。

もういいかげん妹離れしないとね。

繭、あなたがお姉ちゃんなんだからね。

そういう声がいつからか聞こえてくるようになって、少しづつ私と澗の間に降り積もつていく。

いつまでも一緒にはいられない、それが当たり前のことなんだからと。

最初はたつた一つの卵から生まれても、一度分かれたてしまつたものは一つに戻ることはないし、大人になるにつれ、いつまでも同じであることはできない。同じだったはずのもの

のは、別々に産まれて、別々に生きて、別々に死んでいくし
かないのだと。

繋かれた二人の手は、いつしかその重みに耐えられなく
なつて離れてしまふかもしれないと。

家族だと、姉妹だと、双子だと言つても結局は別々の人生
を歩む他人なのだから。

「……そんなの、いやだよ。」

私はただ、澗とずっと一緒にいたいのに、いたいだけなの
に」

年齢が上がるにつれ、世界が広くなっていくにつれ、澗と
私との間の距離が広がっていくのがわかつた。

母のお腹の中ではたつた二人きりだったのが、産まれては
家族という存在ができ、近所の人たちとのつきあいができ、
保育所や幼稚園に行けば友達ができる。あたりまえのよう
に。

けれど私はそのあたりまえがいやだった。

幼稚園や小学校に上がつてから澗には友達がいっぱいできた。
私とは対照的に。けれど私を誘つて、「お姉ちゃんも行くこ
よ」と言つてくれていた。だから私は澗といつても一緒にその
「友達」達と遊んでいた。私からは積極的にその子達と遊ぶ
ことはなかつたけれど、太陽のように輝く澗の周りからは絶
対に離れたくないというだけの思いで、一緒に遊んでいた
……本当は、そんな子達と遊びたいなんて思ったことは一度
もなかつたのだけだ。

オモイビト
ううん、むしろ、その子達は邪魔だった。澗と私の間に割
り入つてこようとする邪魔なやつら。澗は私だけをどうして
みていてくれないのか、私はいつも澗のことだけを今でも見

続けているのに、どうして同じ双子の姉妹なのに、澗はそう
じゃないのか。歯がゆくて、悔しくて、悲しかった。

私は表面上はその澗の友達たちと普通に付き合つていた。
双子の場合名前の問題とかがあるから、学校のカラス分け
では普通は別々になつてしまふ。けれど私の場合幼稚園のこ
ろから澗がいないと泣いてしまふ、などの理由を母が先生方
に話していてくれたおかげで二人は同じクラスですつといら
れた。二人一緒にいられたから、私は澗と一緒に「友達」達
と普通に付き合つていられた。

けれどその友達付き合いも、『あの日』以降にはほとんど
無くなつた。

付き合う必要もなくなつたから。
私が澗についていくために追いかけることができなくなつ
てしまつたから、かわりに澗は私をいつも気にかけてくれる
ようになつた。

こんなに嬉しいことはなかつた。

澗はずっと小さかつた昔みたいに、私のもとに還つてきて
くれたのだと。

私は澗を縛りつけているのだと、そのことがとても嬉しい
のだと。澗の心を私の全てで縛りつけて、私のことだけを考
えるようにしていた。澗の全てを私のものにしたい、同じよ
うに私の全てを澗に欲してもらいたい。私が澗に注ぐ気持ち
と同じ強さで澗にも返してもらいたい。

澗と一つになりたい。

本当は一つだったものが分かれてしまつたのが双子。

私と澗は陰と陽のように見える。輝いている澗と、その光
を受けてひっそりと輝くしかない私。

けれど、それだけじゃない。

本当は溇の中にも私と同じ昏いものがあり、私の中にも溇と同じように輝くものがあると思う。けれどそれが表面にでているかどうかは違っている。小さくて大きな違い。小さな違いが積み重なってどんどん大きな違いになってしまふ、なつてしまつた。そうして溇と私は別々のものになつていつてしまつた。

変わらない私の心と、変わつていこうとする妹の心。

私の心はあの時からちつとも変わつていない。変わりたくない。

大人になつていく身体と、小さなままかわらない心。

初めて初潮が来た時、私はとても恐ろしくなつてしまつた。大人になつてしまふ、一人になつてしまふ、溇と違う人間になつてしまふ、そのことが恐くて恐くてしかたなかつた。溇に抱きついて、いやだいやだと泣きじゃくつて。

赤ちゃんが産めるようになって、大人になつて、見もしらぬ男の人と一緒になつて子供を産んで、溇も私とは別々の場所て結婚して男の人に抱かれて離れ離れになつて私以外の人のものになつてしまふ。それをみんながおめでとつておめでとつていいながら、笑顔で祝福して、私の悲しい気持ちなんて誰にも知られないで深く暗い闇の底に沈められて、それでも幸せだよつて、嬉しいつて気持ちいいつて、溇はきつと心からそう思つているのに、私はうそをつきながら死ぬまで、お婆さんになつてくしゃくしゃになつて死んでしまふまで、そんな気持ちを抱えながら生きていかないといかないんだと。

本当は溇とただ一緒に、ずっと一緒にいて、大人になんてなりたくなくて、いつまでも溇と二人だけで一緒にいたいのに。

溇と一つになりたいだけなのに……それだけなのに、私達はもうこんなに大人に近づいてしまつてゐる。大人になつて、溇と別々になつてしまつてゐる。だんだんと、少しずつ変わつていつてしまふ。

いやだ。

そんなの、いや。

私は大人になんてなりたくない。

もう、これ以上変わつてしまふのはいや。

溇と違つてしまふのはいや。溇が私から離れていつてしまふのはいや。

私が溇と違つてしまふのはいや。溇がわたしと違つてしまふのはいや。

統計資料や心理学の本を調べると、こんな風に一卵性双生児で自分の半身と離れたくないつて思う人よりも、それぞれが別々の違う個性を出して区別をわざとつけて変わつていく方を望む人が多いらしい。

けれど、そんなこと私には信じられない。

私と溇はもともと一つだったのだから、一つだったものがどうして違つてしまわなければならぬのかわからない。どうしてもう一度一つに戻りたいとは思えないのだからどうして別々にならないといけないのかつて。

わからない。わからない。

私にはわからない、わかりたくもない。

溇がどうして私から離れていつてしまおうとするのか、私にはわからない。

私の側においてほしい。私のことだけを見ていてほしい。同じ場所で、同じ息を吸つて、同じものを見て、同じ声を聞いて、

同じものを感じていたのに。お互いのことだけを感じて生きていけたらいいのに。

なのに、どうして漣は私から離れていってしまうの？

どうして、わたしよりもそんなよくわからない他人を選ぶの？

私をほっておいて、私の知らない人と同じ時間を過ごそうとするの？

いやだ、いやだ、漣の心がわからない。

私から離れようとする漣の心がわからない。

どうしてこんなになっちゃったんだろ、どうして別々になっちゃったんだろ。こんなにも私は漣のことだけしか考えられないのに、どうして漣は私と同じ様に私のことだけを考えてくれないのだから。

約束したのに、ずっと一緒だって、お姉ちゃんと一緒にだって言っていたのに、お姉ちゃんごめんなさいって言ってくれたのに、もう忘れてしまったの？ いやになっちゃったの？

……そんなの、許せない。

漣に、もう一度わからせてあげないといけない。

私の気持ちと一緒に暮らしてもらわなくちゃいけない。

でないと別々になっちゃいますから。

たった一つだったものは、決して別々になっちゃいけないんだから。

私たちは同じ卵から産まれたのだから……。

じくじくと、右膝の痕がざわめいている。冬でもない限り

はとつくの昔に痛みなんてなくなっているはずなのに。

「漣、痛いよ。」

「足が痛いよ。」

足なんて直らなければいい、大人になんてならなければいい。それが漣と一緒にいるためには必要なことなら。

いつの間にか、私は家の自分の部屋まで帰り着いていた。

クーラーもつけずに閉め切った部屋の中、ベッドの上で天井を睨みつける。

「漣、みお、みお、みお……」

両手を伸ばし何かを抱きかかえるようにして……そのまま顔を手のひらで覆う。

「くふふ、フ、フ、フ……」

こんな思い、漣に言えるわけがない。

漣に言って、漣に理解してもらえないわけがない。

だって私たちは、もう、『違って』しまっているのだから。

§

その日の夜も更けて。

ぬめるような温かさを含んだ風が、開いた窓のカーテンを揺らす、私の部屋で。

「おやすみ」の言葉とともにお互いの部屋に分かれてしばらく経ってから、今日予定していた分の勉強をようやく終えることができた。

気がつく、もう夜中の二時過ぎていて。

机から離れて明かりを消すと、ベッドの上に倒れ込む。

漣は「そんなに夜遅くまで根を詰めて勉強したら、身体に
よくないよ」と言ってくれるけれど、私はそれほど必死に
なっているとは思っていない。ほどほどに、少しだけ漣より
も成績が良いぐらいをいつもキープしている。あまり順位が
離れすぎてもないのが、私にとって丁度良いぐらい。

私はこの右足のことであって、あまり激しい運動はできない。
はつきり言えば体育はかなり苦手な方で見学することも多い。
逆に漣は身体を動かすことが好き。

周りからもよく活発で社交的な妹、大人しく内向的な姉と
いう目で見られているけれど、それを否定するつもりもない。
もとより、それは私が望んで作っているイメージだとも言え
るから。

勉強で主に漣の苦手な理系科目に力を入れているのは、そ
れが好きだからという理由じゃない。いつも漣を頼ってばか
りいる私は、運動もできなくて友達も少なく、それでさら
に勉強も何一つできなければ、もしかしたら漣に愛想つかさ
れるかもしれない、なんて考えたこともあったから。だから
漣にいつもつは逆に頼ってもらえるように、必要とされるよ
うに、漣の苦手な科目に力を入れて勉強した。

ほんの少しでも漣が必要とされているという実感は、私の
心を少しだけ軽くしてくれる。漣に頼られるのが素直に嬉し
いという気持ちも大きいから。テスト前とか、そうでなくて
普段でも「お姉ちゃん、ちょっと教えて」と言ってきてくれ
るのは、二人で一緒に過ごす大切な時間の一つになるから。

でも、あまり成績の差が大きくなりすぎるのは良いこと
じゃない。私はあくまで漣に守られる弱い存在なのだから。

漣が私に対してコンプレックスを持つぐらいに差がつく、な
んていうことは絶対にあってはならないこと。「お姉ちゃん
を守らなきゃ」と思ってもらえるぐらいでないという意味が無
い。

……だから、「お姉ちゃんだからしつかりしないと」とい
う言葉は嫌い。

ほんの少しだけ先にお母さんのお腹から出てきただけなのに、
それだけでしつかりしないといけないなんて理不尽だと思
う。

漣は冗談でもそういうことは言わないでいてくれる。私が
そう言われるのが嫌いだっということを知っているから。
やさしい漣、私を守ってくれる、ずっと一緒にいてくれる、
大切な妹。

妹。

少し前の古典の授業中に先生が話してくれたことを思い出
す。

明治時代よりも前は、先に産まれた方が妹で、神送りと言
われ後から産まれた方が姉だったという。ずっと日本で続い
てきた風習から言えば私が漣の妹で、漣が私の姉だとも言え
るということだ。

それならば、私は漣の妹でありたかった。

どうして今のような法律にしまったんだろう。

『姉』という言葉で示されるものが私には足りないから。
漣の方が良い意味で私よりもずっと姉らしいと思う。そして
私はその姉を慕い頼る妹、そんな関係なら。

面と向かつては言われたことはほとんど無いけれど、周り
の人達は皆、漣ちゃんはしつかりしてるね、繭ちゃんもお姉

ちゃんなら、もつとしつかりしないとイケないよね」「溇ちゃんがお姉ちゃんみたいだね」と、私達を指して言う。言葉に出されなくても、表情がそう言っている。

けれどそんなこと、他人から指摘されなくたってわかつている。貴方達は知らないのだろうか、本当なら、少しだけ昔ならその言葉どおりの姉妹関係だったと、そして私自身がそうだったら良かったのと思っていることに。

どうして今でもそうでないんだろう。本当は自分は『妹』だから、『姉』の溇に甘えたくてあたりまえのはずなのに。私は溇の『妹』がよかったのに。

そうして、溇に「お姉ちゃん」って言って甘えるの。

それに『お姉ちゃん』っていうただの一般的な言葉じゃなく、妹という立場なら自分の名前を溇にちゃんと呼んでもらうこともできる。『爾』っていう、私が私である名前をちゃんと呼んでもらえるから……。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

爾。

まゆ。

この壁の向こうに溇がいる。

この壁の向こうに『お姉ちゃん』がいる。

隣の溇の部屋と壁一つ挟んでベッドがあって、その壁に寄り掛かって、耳をそばだてる。

一枚の壁をへだたてて在る、私の半身。

もう寝入ってしまったのか、耳をそばだててもなにかが聴こえるというわけでもないけれど。きつとベッドの中で安らかな寝息をたてているのだろう。

「溇……おねえちゃん」

呟いて、秘密の言葉が零れ出た唇をそつと撫でる。

ちろちろと指先を舌が舐める。

私は目を閉じて夢想する。

この指は溇の指。この指先は『お姉ちゃん』が私を唇に触れているのだと。

私に触れている。私を求めている。私を求めてくれている……私が願うのと同じように、同じ強さで、同じ思いで一緒にベッドの上にいるのだと。

『まゆ……』

溇お姉ちゃんは、私の背中に寄りかかるようにして、両手を回して私を抱きしめる。

この手は溇の手、パジャマのボタンを慣れた手つきで外していくのは、私のたった一人の大切な人の手。

私を壁に押し付けるようにして、お姉ちゃんと壁との間に閉じ込めながら、私を決して逃げられないように、離れないようにして。

「……溇お姉ちゃん」

まろび出た乳房にお姉ちゃんの手が触れる。ゆっくりと大きく、でも優しく、私の胸を握り始める。そうして肩口に小さなあごを乗せて、頬をすりよせるようにして、耳元で囁く。

『爾は、どうしてわたしよりも胸が大きいのかなあ』

お姉ちゃんはいつも、こんな時だけの意地の悪さを含んだ声で私を責めるから。

「……それは」

『それは？』

「それは……いつも、溇お姉ちゃんが」

オモイビト

『わたしが?』

『お姉ちゃんが、こんな風にしてくれるから、だから』

『こんな風に?』

『ひゃうっ!』

いきなり強く胸を掴まれて、その痛みに声を上げてしま
う。

『こんな風に、いつもいつも繭の胸を揉んであげてるから、
大きくなっちゃうんだね』

『うん、うん』

『ごめんねえ、痛かった?』

『うん、うん』

『でも、おかしいよね。とつても痛いくせに、こんなに、
先っぽを尖らせて。』

普通にしていた時よりも、痛くしたとたんにこんなにピンピ
ンにしちゃうんだから』

お姉ちゃんの指が私の胸の先をコリコリと刺激する。そこ
からしびれるような痛みと快感とが混ぜ合わさった刺激が何
度も何度も頭の中に飛び込んでくる。

『あ、や、ちが……』

『ちがわないよ、繭は。』

繭は、お姉ちゃんに胸を痛くされて気持ちよくなっちゃう
へンタイさんなんだ』

いつの間にか両手で胸を弄ばれて、背中から抱きつかれな
がら、耳の側で意地悪でいやらしい言葉を囁きながら。

『ちがう、ちがうの』

お姉ちゃんに胸をいじられながら苛められながら、私は言
い訳になっていない言い訳を口にして、気持ちいいことを否
定する。これは本当はよくないこと、やっちゃいけないこと

なのに……どうして、イケナイコトはこんなにも気持ちいい
んだらう。血を分けた、遺伝子さえ分け合った肉親と、双子
の姉とこんなことをするなんて、それがどうしてこんなにも
気持ちいいんだらう。

荒くなった吐息。二人分の吐息が部屋の中に響く。

『でもね、大きくなった繭の胸をこするの、わたしは大好
きだから。』

大好きだから、こんなことするんだよ。ずっとずっと大好
きだから、これからもずっとずっと、こうやってしてあげ
る』

お姉ちゃんが私のことを好きだと言ってくれる。私とこん
なことをするのが好きだって言ってくれる。こんな普通
じゃないおかしい私を好きだって言ってくれる。それが嬉し
くて泣きそうになるぐらいの気持ちになっ

『繭、気持ち良い? きもちいい?』

『うん、うん、うん』

『でもね、あんまりおつきな声を出しちゃダメ。』

誰にも他の人には聞かれちゃダメだからね。

……それに繭のこんな可愛い声を、わたし以外の誰にも聞
かせたくないし』

溻お姉ちゃんが私を求めてくれて、独占欲を持って私を
縛ってくれることがこんなにも嬉しい。ぴったりと一つに寄
り添い、私を閉じ込めて。

するするとお姉ちゃんの右手がバジヤマの上下の間隙から
入り込んで来る。

お腹の真ん中のおへその辺りをまるく撫でて、窪みの周り
を中指でなぞり、中心を小さく抉って。

そうして焦らすように私の身体をゆっくりと下りながら、

漸く本来の目的地へと侵入を果たそうとする。

下腹の上で手のひらを滑らせて、肌と布の境界線を指先で辿り、けれどまだその中へとは入ってこずに、代わりに、シヨーツの上から大切な場所を訪れる。薄い布越しに感じられる生暖かさ。

『繭のココ、もうこんなになっちゃってる』

『イヤあ』

羞恥心に堪らなくなる。

しつとりと濡れた布の上、その秘所の形をなぞりながら指を這わせる。布越しにも十分わかる情欲に期待する秘唇のうごめき、息つき。指先がクニクニと上下に動いて刺激を与えて、中指が無理に潜り込むような強さを持つて。

『溼、溼おねえちゃん、お願い』

『なに？』

『お願い、お願いだから』

『お願いだから、どうして欲しいの？』

『お願いだから、お願いだから』

強く、弱く、強く、弱く、けれども決して直接私のあそこには触れようとはせずに。

『お願いだから、繭のいやらしいおんこを直接弄って欲しいって？』

『うん、うん、私のおんこ、溼の、お姉ちゃんの指で！』

身体がベッドの上に倒されて、倒れる。

『あ、あ、は、は』

シートに顔を押し付けて、押し付けられて。

押し掛かれる重さ、重さ？

私は、溼と、お姉ちゃんにおんこ弄られながら、声を押し

し殺して、押し殺せずに声を上げて。

ささやかな草叢を掻き分けて、求めていたものに蹂躪される悦びに。

『溼お姉ちゃん、おねえちゃん』

激しくなる指の動き、私の中心を、今、お姉ちゃんが、溼が触れている。

むき出しになったクリトリスを抓られ、愛液でぐじゅぐじゅになった両唇を割り開いて、うごめく指先が乱暴に全てを犯し侵そうとして。私を、わたしを縛り、弄び、閉じ込め、中心に向かつて落ち込んでゆく。

いやらしい音を響かせて、いやらしい吐息を漏らして。いやらしい乳首を尖らせ、いやらしい肉の芽を剥き出しにして。

ドクンドクンと心臓を高鳴らせ、赤い、紅い血に乗せていやらしい汚らわしい純粹な狂った心を体中に送り込みながら。

薄い肌を血の紅が透けて見えながら。ズクンズクンと、かけがえのない絆、傷跡、痕を疼かせ

て。
『ひう、おねえちゃん、みお、おねえちゃん』
同じ身体持った双子同士で、双子の片割れだけで、血を交

わらせ、肉を交わらせ。
『こころ、こころ、双子のこころの交わり。』
交わりと、分かたれるいのち、こころ。

血。肉。絆。

ずっと一緒にだと、そう言って離れない約束。
約束の場所。

ここにおいて、ココニイテ。

私の中へ、わたしの中で。

繭の中へ、一つの卵へ。

「みお、みお、みお、みおっ」

私はいく。

澗と一緒に、みおといっしょに、みおをおいて、おねえちゃんをおいていかないで、イかないで、逝かないで。

けれど、もう止めることなど、留めることなどできはしないから。

わたしは弱いから、私は哀しいから。

望んでも、求め得られぬことを哀しんで。

そうして、いくのだ。

深い深い場所へ。

ただ一人で。

深い喪失感と気だるさに満たされた暗闇の中。
目を開くと。

汗にまみれたただ一人の姿に気づいて、私は。

私は。

自分の浅ましさと、滑稽さと、罪悪感と、そして澗とは決

して一つにはなれないことの悲しさに、当たり前前の哀しさが許せなくて。

泣いた。

§

翌朝。

澗と私は、いつものように二人で揃って登校している。

いつものように、いつもと何も変わらずに。

「あー、どうして朝からこんなに暑いんだか」

パタパタと手で仰ぎながら、なんでもない内容のことを話しかけてくる。

私はそれに「うん」「そうだね」と、小さく笑いながら、やっぱりいつものような返事を返して。

それが私たちの日常。澗と一緒にいる毎日の風景の一つだから。

「あんまり暑い暑い言っていると、余計に暑いって気分になるよ、澗」

「うー、それはわかってるんだけど」

「冷たいものでも食べれば涼しくなるかも」

「まあ、そだね。」

それにしても、昨日の夜のシューアイスはやっぱり美味しかったなあ」

「澗のおみやげだしね」

澗は昨日私と一緒に帰れなかったお詫びに、駅前の洋菓子店「ケーニヒコロネ」のシューアイスを買ってきてくれた。

お風呂上りに二人で食べたそれは、とても美味しいものだったから。

「ふつふつふ、やっぱりケーニヒコロネのは美味しいからね」

「あれが毎日食べられるなら、澗と一緒に帰れなくてもいいかも、なんて」

「あう、それは許してよー、お姉ちゃん」

「じゃ、今日は一緒に帰ろうね」

澗の気遣いが嬉しくて、でも、それでもやっぱり二人一緒に帰りがかったのも本当で。どんなに美味しいものでもそれは澗が私と離れてしまった結果のもので……。

「はい、今日はずっとお姉ちゃんと一緒になのです」

「他の人と約束しちゃダメだからね」

「でないと?」

「でないと、今度はフルーツゼリーの刑」

「うわ、そりゃカンベン」

冗談めかしながら、今日はちゃんと澗と一緒に帰れるように。

「お姉ちゃんはマンゴーピーチデザートを所望す……るものいいけど、この間から並ぶようになったサマーストロベリーショートケーキもいいかな」

「あーあーあー」

そこで澗は聞こえないふりをして、唐突に話題を変えた。多分これなら今日はちゃんと一緒に帰れると思って、少しだけホっとする。

「うん」

「それにお母さんが言ってた話、久しぶりだよ。あの森に帰るのは何年ぶりかなあ。懐かしいなあ」

あの森、それは、私たちが小さい頃に住んでいた田舎の森のこと。

今更のようなダム工事のために、近々その森は周辺の村と一緒に水の底に沈んでしまうというこらしい。

もしかしたら澗は、あの森が沈んでしまうことを心の奥底では喜んでいるのかもしれない。何故なら、あの森は私と澗との。

「……お姉ちゃん」

「ん?」

「……ううん、なんでもない」

澗は小さく笑つと、また夏休みの予定のことについて話し始めた。

その軽やかに弾む声を聞きながら、同じように笑顔を見せながら、私は心の中に暗い淀みが溜まっていくのを感じていた。

初夏の明るい日差しと対称を成すもの、降り注ぐ陽の温かさが、温かさゆえに腐らせる全てのものを内包する、そんな淀みを。

(今はまだ、澗は私と一緒に居てくれる。けれど、いつまでもいつまでも、ずっと一緒にはいられないから。

澗はまた私を置いていこうとしているのかもしれない。昨日のように、私を一人置いて)

横を歩く澗の手が、時たま私の手を掠める。

じつとりと汗ばむ手。

（でも、それでも　だからこそ、私はもう一度澇をつなぎ止めなければいけない。）

どんなことをしても……）。

私は澇の手を取ろうとして、けれど、出来なかった。

以前よりも、『あの時』よりも、もつともつと澇の気持ちを自分に向けさせるためにはどうすればいいのだろう。

『ずっと一緒』、その言葉を本当にするにはどうしたらいいのだろう。

あの場所に行つて、もう一度澇が自分により負い目を抱くような事件が起きればいいのだろうか、それとも逆に澇が自分に頼るしかないようなことが起こればいいのか。

どちらにしても澇が私から離れていくことだけは許せない、許さない。たとえどんなことになつても、どんなことをしても。

深く、深く、暗い思いに心の中が満たされて。

夏の青い空の下、私と澇は笑いながら一緒に歩いていく。ずっと一緒、その言葉が本当だと思えるように。

……けれどそれは幻のようなもの、夏に立つ陽炎のようなもの。

うそ臭い夏の陽の影に隠れ、昏い想いを募らせ腐らせながら、ただ澇のことだけを考えながら、私は歩く。

不器用にひきずりながら、私の半身と供に。

いつか供にゆくことのできる日が、二人に訪れることを願いながら。

そして、その数週間後。

かつての約束の場所、皆神村、地図から消えた村で。

紅色に染まる双子達の物語　「零々紅い蝶」の物語の

幕が上がる。

昏
く
た
そ
が
れ
く

「溇、私が溇の目の代わりになるから。ずっと一緒にいようね、溇」

白い病室の中。

廊下を歩く人の足音も小さくなって行って、しんと静まり返った病室の中。

ただ二人きり。

私は今、溇の眠っているベッドの傍でじつとその顔を見つめている。

目に包帯を巻き少しやつれた妹の顔は、どこか痛々しく見えて。

「溇」

呼びかけても目を覚ますことはない。

規則正しく上下する胸と、小さな呼吸の音が病室を支配している。

私は座っていた椅子から離れてベッド脇の床にしゃがみ、溇の腕に頬ずりする。

溇の腕に残った、生々しい鎮静剤の注射の痕。そこに……、

……今日もまた、私は口づけた。

§

溇は今、家の近くの総合病院に入院している。

あの森から保護されてすぐは、その麓近くの病院に入っていたけれど、間を置かずこちらに移ることになった。

お母さんは私たち二人が無事 とは言えないまでもちゃんと見つかった朝、取り乱したように泣き崩れた。「ごめんさい、ごめんさい」と謝りながら。

私たちにとってはただ懐かしい場所に帰るといっただけのはずだったこの旅行、お母さんにとつて本当は、ずっと昔にあの辺りで行方不明になってしまったお父さんを最後にもう一度だけ探してみたいという理由があったんだと、後からぼつりぼつりと聞かされた。

もしかしたらお父さんもあの村に迷い込んで行方不明になってしまったんじゃないかと考えもしたけれど、そのことについてはお母さんには言わなかった。

私と溇は、ただ気がついたら保護されていただけで、あの夜に何があったかは全然覚えていない、そう言うことになっているから。ただ一つ微かに覚えてるのは、溇の目は私を助けようとして何かがあって見えなくなってしまうたのだから、はつきりとはしないけれどそんな気がする、そのことだけだ。

私は警察の人やお母さん、病院の人に聞かれた時も、ずつとそう答え続けた。

それ以外にどう答えることができるというのだろう。

誰も信じてはくれないだろうし、確かめることさえ出来ない。

そしてあの場所は今もうすぐ水の底に沈んでしまふ。何もかも私と溇の中の記憶だけを遺して深い深い場所へと沈んでしまふのだから。

溇は病院に入つてすぐは「怖い、怖い」「目が痛い、痛い」と錯乱したように泣き叫ぶことがままたつた。

昏 ~たそがれ~

最近はずいぶん落ちてきているけれど、それでもたまにどうしようもない時がある。そんな時にはお医者様に鎮静剤を打っていただくしかなくて。
今もその注射を打っていただいでようやく眠ったところだった。

頃合いを見計らって、「また何かあったら、すぐナースコールしてね」とお医者様も看護士さんたちも部屋から出ていってしまい、だから今はもう、静かな病室の中で私が一人見守っているだけ。

濁の腕に残った、生々しい注射の痕。
そっと触れて撫でる。

ゆっくりと滑るように手首、手のひらへと指を下ろしていく。
手を重ねる。

今は力ない、濁の手。
私の手をとって、いつも引つ張っていつてくれた手、私を守ってくれた手、そして最後の最後、あの刻、あの場所で私を助けてくれた手。この手が私を繋ぎ止めてくれた、約束を守ってくれた、私を離さないでいてくれた……そしてその代わりに、濁は光を失ってしまった。

濁は、私のために失明した。

濁は、私のせいで永久に光を失ってしまった。

思い出すのは、お医者様から詳しい検査結果をお母さんと一緒に聞かされ、その事実を告げられた時のこと。

その言葉に私は呆然として、そして涙を流した。

お母さんの「なんとかならないんですか、先生!」という声が聞こえたその隣で、ゆっくりと両手で顔を覆い、俯いて

声押し殺した。

今も思い返す、その時の激しい感情
私のせいで濁は……。

……ああ。

涙が零れる。

ああ、ああ、なんて、なんて!

肩が震える。

こんなにも、こんなにも!

唇を強く噛む。

それは

『なんて素敵なことなんだろう』

血の味がする。

こんなにも、私は、なんて、嬉しい。

口の端が歪む。

嬉しくてたまらなくて、涙が止まらない。

あの時、私は。

漏れ出そうになる歓喜の声を押し殺し、昏い喜びに肩を震わせながら、とめどなく涙を溢れさせていたのだと。

そしてそのことは、私以外、誰も知らない。

§

オモイビト
「溥、みお……だいすき」
注射痕に舌を這わせ、いとおしむように何度も何度も舐める。

私は溥が「私を助けるために」目が見えなくなつたということに対して、負い目なんてもの一切感じてない。

周りからそう見えてるのは全部、嘘。ただの演技。

私は、私以外の人を全部だまして、そして溥の傍にいます。同情を誘う嘘の涙を流し、心ではほくそ笑みながら、溥の傍にいます。

ただ一つ、「溥の傍にずっといたい」という言葉以外は、溥の失明がもう二度と直らないと告げられたあの時、私の心にあつたのは、痺れがくるような恍惚感、溥を本当に私のものにできたんだという喜びだけだった。

けれど、周りが「溥は爾を助けるため失明した。だから爾はこのことに責任を感じている」と考えてくれるのは、私にとつてとても都合なこと。私が溥の目の代わりになって、いつでもどんな時でも傍にいて世話をしていられるための口実として、これほど有用なものはないのだから。

だから私は、お母さんやお見舞いきた人たちの前で、溥への償いの言葉を口にする。

「私が、溥の目の代わりになるから……ごめんなさい……溥」

わざとらしくないよう、厭味にならないよう、私が心の底から溥のことを心配して、溥に負い目を感じて、どうしても溥の傍にいたい、いなければならぬという思いでいることをアピールするために。

腕から唇を離して立ち上がり、溥の寝顔を見つめる。ベッドの上、溥の上に体重をかけないよう気をつけながら、横から覆いかぶさつて。

溥の顔に私の顔を寄せる。

いとおいしい私の半身。

私のもの。

私の全て。

溥の唇に、指先でかるく触れる。

溥の唇に、唇でかるく触れる。

ついはむようにキスをする。

唇を滑らせ、唇から頬、頬から唇。

ちるちると舌でなぞる。

上唇、下唇、少し開いた間を軽く割って、白い前歯の形。

吐息を邪魔しないよう、小さく、何度も、何度も。

生暖かい息、溥の口から漏れる息を、私の吐くそれと絡ませる。

混ぜり合つた吐息を、もう一度溥が吸って、吐いて、私が

また吸って。

溥の口の中、喉、肺の中、全部が私と溥の混ぜり合つた匂

いで満たされる。

同じように、私の口の中、喉、肺の中も。

嬉しい。

指で細い溥の髪を梳く。

今度は髪が生え際、鬢に唇を寄せる。

指先で耳朶の形をなぞる。

白い包帯が触れる。

白い包帯が触れる。

可哀相な漣、私のために光を失った目、その証の包帯、包帯の上から漣の臉に触れる。私のために失くしてくれたいもの、その大きさを感ぜられて涙が流れる。

唇を寄せる。布越しに臉の上に口つける。

右目、左目、同じように。

「漣、みお」

鼻梁にそって指を這わせた後、舌先で可愛らしい鼻の頭と、

小鼻をつつく。

そして頬と頬とをすり寄せる。

小さく掠れるような声で、私のものになった妹の名を呼ぶ。

眠りから起こすための声ではない、私のものだということを確認するための声で。

「私の漣」

もう一度唇を唇で塞ぐ。

離して、その不思議と紅い唇を見つめて。

私は口の中でくちゅくちゅと唾を集める。

漣の唇に、そのかすかに開いた隙間に、それを垂らす。

零れる唾が漣の唇を濡らして光る。

私は笑みを浮かべて、また唇を寄せる。

舌を出して、零れた唾を舐め取り、また染み込ませるように舐め続ける。

「ぶちゅぶちゅ」という音。

漣の唇を舌で舐めて、唇をしゃぶり、また舐める。

うれしい。

……けれど、まだ足りない。

お互いに舌を絡めあうような深い深いキスはまだできない

い。

静かに眠る妹に、私は夢見るような声で言い聞かせる。

「ねえ、漣」

私の中は、いつでも漣のことだけなんだよ」

唇から頬を滑り、顎のラインに沿って。

首筋から続く華奢な鎖骨へと、痕が遺らないようにただ軽く唇と舌を這わせていく。

今の私は、漣に私の匂いをつけてるだけ。

私のものだっていう印をつけてるだけ。

「あの刻、私の声、聞いてくれてたよね。」

今はまだそういうことちゃんと思いつける状態じゃないけど、

ちゃんと聞いてくれてたよね」

漣の首元から顔を離し、そのまますうと耳に唇を寄せ

て。

「でも、漣がそのことちゃんと思い出してくれた時には

「

だって、まだ『その刻』じゃないから。

「漣がもう私のものだって、漣も素直に受け入れてくれるようになってるよ、きっと」

私はそつと身体を離すと、ベッドの上から下りる。

そうしてもう一度彼女の細い手を取ってから、何も知らない

い風な静かな寝顔に微笑みかけた。

「退院しても、ずつと傍にいてあげるから。」

ずつと傍にいて、漣には私しかいないって、おしえてあげるから」

静かに眠る『私のもの』に、私は夢見るような声で告げる。

オモイビト

「澪は、私のものだからね。」

ずっと一緒にいようっていう約束、ちゃんと守ってあげる

から。

ね、澪。

だいすきだよ……澪」

私は澪の手をキュッと握りしめた。

「だから、はやく退院できるといいね、澪」

紅い夢の夜

夢を、見ていたの。

もうわたしの目では見るのでできない風景の夢。

お姉ちゃんと一緒にあの懐かしい岸辺に並んで腰を下ろし、遠く山辺に落ちる紅い夕日をただ眺めている、そんな夢を。

木々や草々が風に揺られ微かにたてる葉擦れの音だけが聞こえて。

話す言葉もなく、お姉ちゃんはわたしの隣でわたしと同じものをただ静かに見つめている。互いの肩を寄せ合い手を重ねて、今にも落ちてゆくとうとする紅と黒とが混ざり合う瞬間の姿を遙かに望んで。

紅い、紅い。まるで何かが滅び命を失う断末魔の瞬間にだけ輝く光のような、ある刹那にだけきらめいて後はどす赤黒く闇に沈み込む色のような。血のような紅い夕日、紅く染まる雲間、紅の景色。

「薄」

声が出た。

いつもの、お姉ちゃんがわたしを呼ぶ小さな声。

それはいつものこと、いつもの仕草、いつもの重さ、いつもの温もり。肩にもたれ掛かってくるお姉ちゃんのいつもの心地よい重さを……わたしは一瞬だけ感じて、すつとその重さが消えた。

驚いて振り向くと、そこにお姉ちゃんの姿は無くて。

「お姉ちゃん？」

代わりに、穏やかに紅い塵が舞い落ち、それは一つの形と なった。

紅い蝶がはばたく。

紅い蝶、はつきりとしらない記憶の向こう、いつかの刻に見た紅い蝶、悲しい双子の蝶、失われた半身の成れの果て。紅く輝く鱗粉を撒いて、わたしの周りをくるくるひらひらと舞い、ふわりと胸のリボンの上にとまる。

そして、理解した。

ああ、お姉ちゃんは蝶になったんだと。

紅い夕日の輝きの中で、その紅い色そのままの羽を持つ蝶に、一瞬を永遠に代える遠いとおい昔からのおまじないを唱えて。

日は落ちる。

夜の帳が落ち、闇が世界を覆い尽くして。

空にあるはずの月も星も見えず、何も無い何も見えない暗闇だけの世界がやってくる。

でも、大丈夫。

でも、怖くない寂しくない。

わたしにはお姉ちゃんがいるから。

暗闇という名の優しい繭の中に籠もり、何も無い何も見えない世界の中で、お姉ちゃんの紅い蝶だけが、わたしの胸の上でトクントクンと輝いているのが分かるから。

だから大丈夫。

だから怖くない寂しくない。

すつとお姉ちゃんと一緒にいてくれるから。

幽かに、だれかが唄っている子守歌が聞こえる。

ねんねん、ころりよ、おころりよ。

ぼうやはよい子だ、ねんねしな。

暗闇の中の温かさ、どこか懐かしい唄声が誘つ安らぎ。

わたしは、夢の中で夢を見る。
わたしの居場所、わたしのありが。
お姉ちゃんの在り処、お姉ちゃんのいばしよ。
それが『ここ』なのだ……。

§

「……………みお」
「……………」
「薄」
「……………ん……………お姉ちゃん……………」
気がつくと、お姉ちゃんがわたしを軽く揺り起こしている。

少しうつらうつらしていたのかな、というかつたた寝して
いたのはこの状況から考えて間違いない。

わたしはゆっくりと目を開く。
けれど、リビングの風景も蛍光灯の光も何も目には入って
こない。少しだけの期待が、ため息とともに消えていく。
目を覚ましたはずなのに、どこにも光のない世界。夜も昼
も関係ない、瞼を閉じて寝ているのと変わらない世界が、今
のわたしの世界。

なぜならわたしは、少し前に失明していたから。

「お姉ちゃん、わたし寝てた？」
「うん、寝てた、三十分ぐらい」
「映画は？」
「消しちゃったよ」

今夜はお母さんは少し離れた所の知り合いのお医者さんに
会ったために出かけていて、お姉ちゃんと二人きりだった。

リビングのソファでお姉ちゃんの肩にもたれ掛かるように
して……あ、実は口の端に涎も垂れてるっぽい。ティッシュ
を探そうとわたしが手を伸ばすよりも早く、お姉ちゃんが
ティッシュで涎を拭き取ってくれる。

「ありがと」
「ちよっと恥ずかしい。」
「もう寝よつか」
「そうしよつか」
「じゃ、クーラーはもうちゃんと効いていると思っから隣の部
屋に行こ」
「……………」
「うん」

夏休みのあの事件の後、わたしの目も二度と見えるよ
うにはならないということはそれとなく覚悟してた。

眼球や視神経がダメになったのではなく、どうやら脳の中
の視覚を司る部分がおかしくなってしまうのが原因ら
しい。

本当のことを言い出せないそぶりのお母さんに対して
「ちゃんと話して」と強く言ったのは、あきらめと生殺しの
ような状態が続くことにもう嫌気がさしていたから。

それに、あの、家族で行った懐かしい故郷、秘密の場所で
起こった事件。あの夜の、地図から消えた村での恐ろしい体
験は、実は頭にもやがかったようによく思い出せない。な
にかとても恐ろしいものを見て、お姉ちゃんと一緒に
逃げてきたというくらいにしかわからなくなっている。

けれど思い出せないというそのことがどれほどありがたい

ことなのか、というのは本能のような部分で分かった。わたしの目が見えなくなったのはその恐ろしいなにかを見てしまったからで、それもただ目が見えなくなっただけで済んだのは幸運としかいえないような状況だったんだと。恐ろしくおぞましいなにかは、わたしの視力と記憶とを道連れに脳の一部を焼きつかせてしまったんだと。

もちろんそれで総てあきらめられるわけじゃないけれど……悲しみや憤りも何もかも、ヒステリー起こしたい気分も合わせて、もしかしたらソレと一緒に壊れて消えてしまったのかもしれない。

だからお医者さんには、いきなり目が見えなくなったという患者さんの中でも、ものすごく落ち着いている方だと褒められてしまった。嬉しいやら嬉しくないやら。

そして病院から家に帰ってきて、わたしの日常生活は変わった。

以前と違って目が見えなくなったんだから当たり前といえは当たり前なんだけれど。

ただ、まだ学校は始まっていなくて夏休み中だというのも助かっている点の一つ。それにもかしら夏休みが開けたら暫く休学するかもという話も出ている。

それでもまずは家からでも、できるだけ早めに、『見えな生活』に慣れた方がいいのではというお母さんの意見を、お姉ちゃんは「まだ慣れるには早すぎるし、怪我をしたら大変だから」と強く反対した。

結局お姉ちゃんの意見に折れる形で、二階のわたしの部屋から細々としたものや洋服、それにお布団とかを一階のリビング隣にある和室に移して、そこがわたしのしばらくの間の

部屋ということになった。

当然のように、と言つていいのかどうかはわからないけれど、お姉ちゃんもわたしと一緒にその部屋で寝ることになったのだけれど。

お姉ちゃんは、わたしとずっと一緒にいてくれる。

まだ病院にいた時は、お見舞いの面会時間が始まる朝から夜まで。家に帰つてからは、それこそ文字通りずうつと

ただしおトイレ以外は、寝るときだけでなく、ごはんの時にぼろぼろ落したり欲しいものがみつからなかったりしないようにしてくれたり、着替えの手伝いやチエック、髪を梳かしてくれて、顔を洗う時、歯を磨く時、ぼうつとして音楽を聴いている時はそばで同じ音楽を聴いて、家の中を手さぐりで歩いてリハビリする時にはずっと見ていてくれて。

それに、恥ずかしいけどお風呂も一緒、わたしが絶対にダメって言つても、「滑つたり熱湯で火傷したりしたら大変だから」と言つて聞いてくれない。一度は聞き入れてくれたと思つたら、後からなんでもないようにドアを開けて入つてきたりして、どうしてもわたしを一人でお風呂に入らせるつもりは無いみたい。わたしとお姉ちゃんは家族だし、もともと一卵性双生児なんだからほとんど同じ身体、お姉ちゃんだって恥ずかしがる必要はない、ない、ない!……と思つても、やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしくて。しかもなんだかお姉ちゃんはずつとわたしの裸を見ているんじゃないかって、そんな風に思う時もある。背中を洗ってくれて、髪をすいでくれて、湯船に入るとき、出る時、脱衣場で着替える時、お姉ちゃんの強い視線を感じる時がいっぱいある。

わたしは、いつもお姉ちゃんに見られている。それは姉ちゃんが、いつもわたしの傍に居るから、いてくれるから。

こんな調子じゃ、わたしはきつと『見えぬ生活』に慣れることなんてできないんじゃないかと思うくらい、お姉ちゃんは世話を焼いてくれる。わたしが「心配ないから」と言っても、「でも……やっぱりダメだよ」と言っただけで、まさに過保護という言葉は今の姉ちゃんのためにあるように。

わたしの、夏休みが終わる前に少しでも自分一人でちゃんとしてできるように頑張らないかという気持ちも、そんなお姉ちゃんの前ではすぐに消えてしまふ。たった一人で暗闇の世界に居るのは怖いという本音の部分が、ただお姉ちゃんがいつも一緒に居てくれるなら怖くない、お姉ちゃんの体温が感じられるなら大丈夫、という気持ちに覆い隠されてしまふ。

少し前まで当たり前のようであつた光ある世界に代わつて、前よりもずっと近くに感じられるお姉ちゃんの存在というのがあつて。わたしにはそれだけが確かなもののように感じられるようになってきて……これじゃイケナイ、イケナイと首をふつても。

思い出す、お姉ちゃんの顔

目が見えなくなつてから、わたしはよくお姉ちゃんの顔を触るようになった。

記憶にある顔の形を指でなぞつては確かめていく。白く柔らかな頬、瞼、おとなしさを表した眉の形、はらはらと前髪

を梳いて、額、鼻梁に沿つて、可愛らしい小鼻、湿りけのある息が漏れる唇。もう一度頬そなぞつて、唇へ。お姉ちゃんの唇、舌がちろと指先に触れる。わたしの名を呼んでくれる唇……わたしの指をお姉ちゃんの手が握つてくれて、そうしたら、わたしは指を絡める。絡められた指がほどかれて手の内と外が入れ代わると、今度はお姉ちゃんがわたしの唇に触れる。お姉ちゃんの指先が唇をなぞり滑つて頬に当てられ、いつの間にか互いの吐息が混じり合うくらいに二人の顔は近づいていて。

掠れるような小さな声。「濡」という吐息。「お姉ちゃん」という吐息。

お姉ちゃんの匂い、ふわりと甘い香り。

重ね合わされる唇。お姉ちゃんの唇。柔らかさと、温かさ。ついでに。

少し離れて、もう一度。

唇を開いて、受け入れて、受け入れられて。

蕩けるように、ねっとり熱く、甘い、お姉ちゃんの舌とお姉ちゃんの唾液。

ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ

舌を突き出して、絡めて。唾液を互いに混じらせて。

お姉ちゃんの味を感じられるように、お姉ちゃんがわたしの味を感じられるように。

深く、深く、長く、長く、永く。

お姉ちゃんとわたしとのファーストキスは、つい数日前のこと。お母さんのいない夏休みの昼下がりに、クーラーの効い

オモイビト
たりリビングのソファの上で、今と同じようにお姉ちゃんの顔を確かめているうちに自然にそうなってしまうていた。
驚いたのは唇が触れ合った瞬間だけ、わたしの心はずくにそのことを受け入れてしまったから。

お姉ちゃんとキスしているんだという、本当に自然で当たり前のような気持ちで、

「……キス、したよ」

「……キス、したね」

と、いう風に。

そんな軽いキスが、もつと深い口づけに変わるのとは当たり前のことだった。

わたしは、目が見えなくてもキスという行為は変わらないと思う。だって、キスは普通目を閉じてするものだから。目が見えても見えなくても変わらないものを見つけたら、だから嬉しい。お姉ちゃんと一緒に見つけられた、だから幸せ。

嬉しくて幸せな気持ちになれるから何度だってするし、したいとも思う……お姉ちゃんとのキス。

お姉ちゃんと抱き合い互いの身体を寄せ合って、唇と唇とを重ね合わせる。

それがこんなにも心地よくて、安心できて、温かくて、暖かくて、気持ちよくて、湧けるような気持ちになれるのは、どうしてなんだろう。

お互いに求めて、求められて、互いに応えて、応えられて。お姉ちゃん存在だけが感じられるということが、こんなにも泣きたくなるくらい幸せだなんて。

もう、この温もりがない世界なんてわたしには考えられない。

今のわたしにとって一番確かに感じ取れるもの、それが、お姉ちゃんだから。無くなってしまう目のかわりに、お姉ちゃんがわたしを呼ぶ声と、お姉ちゃん的首筋に顔を埋めた時に香る匂いと、唇を交し合ったキスの味と、互いに繋いだ手の温もりが、わたしを満たしてくれるから。

わたしは、もしかしたら……ううん、もしかしなくても、少しおかしくなっているのかもしれない。

普通に家族に向ける愛情とは違う愛情、恋慕、孤独と寂しさの穴埋め、依存心、独占欲、狂った恋、恋焦がれるもの、つなぎ止めたい、一つになりたい、一つに還りたいという気持ち、それを何時からだろう、知ってしまったように思う。お姉ちゃんがわたしに向けている気持ちがそれだと気づいて、そしてわたしも同じような気持ちになってしまっていること。

わたしたちはもう戻れない所へと、最初の一步を踏み出してしまっているのかもしれない。

§

浅い眠りの中で、わたしはまた同じ夢を見る。

うたた寝していた時と似た、紅い蝶の夢。

けれど少し違うのは、胸の紅い蝶が小さいままではなくどんだん大きくなって、わたしを覆い尽くしてしまったこと。夢が現が分からないような、不思議な気分。

クーラーが弱いのか、少し暑い……。

あつい……あつい……。

寝る前にはちよつとよく効いていたクーラーが今は全然涼しくなくて、とてもあつく感じられる。

部屋の空気が淀んでいるような、けれどただ暑いというだけじゃないあつさ。湿気を含んだあつさ。甘く熟れたようなあつさ。

ずくんずくんと、なにか身体の奥底を刺激するようなあつさ。ドロツとしたあつさ。

「お姉ちゃん……あついよ」

小さく口に出してみる。

もしもお姉ちゃんもこのあつさに気づいて起きているなら、なんとかしてくれるかもしれないと考えたから。

けれど、その願いは予想もしなかつた形でわたしに返される。

「……そう、あついよね、溼。

わたしもね、とてもあついの……だから」

直接的に……そう、わたしの唇に。

目を見開く！

「おねえちゃっ」

けれど、やっぱり何も見えない。

でも見えなくてもわかるのは、わたしの真上にお姉ちゃんがいるということ。突然わたしにキスをしたということ。両手を押さえ込まれのしかかられて、身動きのとれない形で、叫ぼうとした口を塞ぐようにして逆により深くキスをされて

いる。

なぜ、どうして？

わからない。

お姉ちゃんの匂いがいつもよりずつと強く感じられる。じーんと痺れるような甘い香り、甘い味。

逃げようともがいても逃げられない。お姉ちゃんの舌はナメクジのように動いてわたしの舌を放そうとしない。絡めて、逃げて、また絡め捕られて、逃げているのが逃げたいからなのか、逆に捕まえて欲しいからなのかわからなくなるような舌の動き。いやらしくウネウネと動き、吸い尽くすような動き。

息が苦しい。あつくて苦しい。

甘くて苦しい、あつくて苦しい。

お姉ちゃんの舌が甘くてあつくて苦しくて怖くて、どうしよう、キモチイイ。気持ちよすぎて、怖い。

放して、離して、もうダメになっちゃうから。どうしよう、どうしよう。

にゆるにゆると、わたしはお姉ちゃんに口の中を犯されてる。

お姉ちゃんに犯されてる。犯されようとしている！

手を放して、唇を離して、身体を離して、これ以上入ってこないで、おかさないで。

お願いお姉ちゃん、くるしくしてくるしくて気持ちよくて、何も分からなくなりそうだから、お願いだからはなして、わたしを、おねえちゃんっ！

ぬばあ

ぬばあ

わたしの思いが伝わったのか、それとも息が苦しくなったのか、お姉ちゃんはわたしから唇を離した。

はあはあと短く息を吸って吐いて、呼吸を少しでも整え

オモイビト
る。

そして分かるのは、お姉ちゃんが今も互いの鼻を擦りつけ
るような位置でわたしを見つめていること。両手は開放されず、
わたしの息とお姉ちゃんの息とか混じり合って熱く渦をま
いでいる。

「お、おねえちゃん、どうして」
もう一度聞いてみる。

沈黙の後、答えは返ってきた。

「……夢を見た、から」

「夢？」

「そう、紅い蝶の夢を」

「蝶の……わたしと同じ夢？」

「溼と同じ夢よ、多分」

でも溼のと違うのは、私が蝶で、溼をその私の羽で包み込
んでしまうところ」

わたしには何があるかわからない。

双子だから同じような夢をみたというの？ でもそれとお
姉ちゃんがわたしを犯そうとする理由が繋がらない。

「どうしてなの……」

でも、もしかしたらそれもどうでもいいのかもしれなかつ
た。

なぜなら、わたしは不思議と知っていたから。お姉ちゃん
がわたしをどういう目で見ているのか、わたしをどうしたい
のか、そのドロドロとした思いを、それを深く考えないよう
にしていただけなんだと。

だからって、いいの？ わたしは。

わからない、わからない。

「今夜は特別な夜なの」

「特別な？」

「そう、溼と私にとつての、特別な夜」

「……紅い夢の夜よ」

「紅い夢……」

「すべてが紅く染まる夜だから」

「紅と紅が交わる夜、約束の紅い糸で溼と私が結ばれる夜」

「……わからない」

「すぐにわかるわ、溼も」

「わたしには、わからない」

「決まっているの」

「そう、あの、約束の果たされた夜から」

突然、見えないはずの目に白くフラッシュバックする、あ
の時の記憶。

ねえ、溼。

本当はあのとき崖から落ちたのは、わざとだって気づ
いてたんでしょ。

溼が離れていくのが怖かった。

溼が私を置いて、遠くへ行ってしまうんじゃないかっ
て。

引き裂かれるような痛みの中、私はただ嬉しかった。
これでもう私のものだって。

溼がずっと傍にいてくれる、いつも心配してくれる、
私だけを見てくれる。

いつも私のことを想ってくれる。なんでも言うことを
聞いてくれる。

いつも心配してくれたよね？ この足が痛むたびに

……私は嬉しかった。

もう置いていかないよね。
ずっと一緒だよ。
ずっと一緒にいよう。

「約束したよね、ずっと一緒だって。
約束したよね、一人にしないって」

ああ、わたしは。

わたしはもうお姉ちゃんからは離れられない、逃れられないんだと理解して。
涙が流れた。

喜びとも、悲しみともつかない涙。嬉しくて悲しい涙。

「お姉ちゃん、わたし、は……もっ、お姉ちゃんのものなんだね」

お姉ちゃんの唇が、私の涙を優しくなぞる。

「濡は、私のもの。」

でもね、同じように私のすべてを濡にあげるから。

だからいっしょよ、同じことなの」

そうしてわたしは、再び唇を奪われる。

もう引き返すことのできない、紅い夢の夜の始まりを告げる証として。

§

はあ、はあというわたしの声が、部屋の中に溶けるように消えていく。

紅い夢の夜
ねっとりとしたあつい部屋の中では、もうクーラーなんてたぶんついていないんだろうと、少しだけそんなことを考える。

考えたたそばからすぐ、頭の中が部屋の中と同じ温度と湿度をもったような、あつくねっとりとした思考に再び取って代わられる。

体中から伝えられる指と舌と重ねられた肌から伝えられる快感が、わたしの心を一秒たりともまともでいさせてくれない。

「んふ、ん、あ、」

わたしの身体はもう、わたしだけのものじゃなくなってしまうたから。わたしは、今、お姉ちゃんに愛されているから。

身体中のすべての箇所を、念入りに撫でられ、舐められて。

最初にバジヤマのポタンが外され、胸があらわにされた。

思わず隠そうとしたらけど、許されなくて。すぐに、首と肩と、鎖骨と。二つの胸のふくらみをやわやわと揉まれて、びんとした乳首を舌と指で転がされて。乳房の影の汗、脇の下の汗を舐めとられて。

「濡の胸、可愛い。」

綺麗なピンク色で、それなのにこんなにツンと立たせちゃって」

「ひあうっ」

右の乳首を舐め吸われながら、左の乳首を強くつままれて思わず声が出る。くにくいと弄られ摘まれて、指の腹で押しつぶされて。そのまま胸全体を揉まれ、大きく優しくいたわるように。優しく優しく、穏やかに穏やかに。左右の胸を手のひらと舌とで優しく愛撫されるのが、こんなにもキモチイイことだなんて。

お姉ちゃんに胸を好きにされていることに酔ってしまいそ

オモイビト
うで。ピンクの露がかかったような頭の中、わたしはお姉ちゃんにこんな胸を揉まれちゃったりしたら、もしかしたらお姉ちゃんよりもわたしの胸の方がずっと大きくなっちゃうんじゃないか、なんてことを考えてしまう。

実はわたしの胸はお姉ちゃんよりもちよつとだけ小さい。そのことはちよつとだけ、本当にちよつとだけだけどずっと気にしていた。もしかしたらお姉ちゃんはわたしが胸のことを気にしていることを知っていて、だからそんなわたしのことが可哀相になって、だから大きくしてあげようとしてこんなにしてしてくれるのかなあ、なんて、なんて、胸を揉んで撫でてくれるのはだからかなあ、なんて「いっ」

突然、身体の頂点をなにかが貫くような刺激、痛みが走った。

乳首を噛まれたんだと、痛くて涙が出るほどに強く歯を立てられたことがわかって、抗議の視線を向ける。安心してお姉ちゃんに身体を任せているのにひどいよって。

なにお姉ちゃんはまだニンマリと笑ってまたわたしの胸に吸いついて。ごめんねの代わりに噛んだところを舌でべろべろべろと舐めて、また唇を離したかと思うと今度は舌全体で胸を大きく舐めて。舐めて舐めて舐めて、わたしの胸はお姉ちゃんの唾液でべたべたにされて、お姉ちゃんの唾液が首の方にも脇にも垂れて。

でも、そんな生暖かい気持ちよさの中に浸るだけでは当然許されなくて、唾液まみれの乳首を指でまた摘まれて、それを繰り返されるうちに乳首への痛みが、どうしてだろっ、すごく気持ちいいもののように思えて、ただ優しくされるだけじゃないちびれるような気持ちよさに感じられて、甘くあつ

い暖かい気持ちよさの中に感じる痛みが、こんなにもキモチイイものだなんて知らなかったのに、わたし知らなかったのに。

わたしの乳首は、お姉ちゃんに痛みを与えられるほどに固くピンと立ってしまうのがわかってしまっって。

きもちいい、きもちいい。

お姉ちゃん、わたしの胸、きもちいいよ。

痛いの、気持ちいいよ。きもちいい、キモチイイ。

「あ、あ、はっ、あっ」

わたしはお姉ちゃんの指と舌と歯にキモチイイを与えられている。

わたしの胸が、胸だけでわたしのキモチイイがいつぱいになって、いつぱいにいつぱいにお姉ちゃんの舌で舐められてきもちよくなつて撫でられて幸せになつて満たされて、にゆるりにゆるりとなでつけられ、お姉ちゃんの唾液を染み込ませられて、きもちよくてきもちよくて。どうしようもないキモチよさに堪らなくなつていやらしい声がでて。お姉ちゃんがわたしの胸をすきに弄つていじりまわつて、わたしお姉ちゃんに好きにいじられちゃつて、舐めて舐めて撫でて撫でて。やわやわふにふに、ちゅるちゅるちゅるちゅる。

「あ、や、あ、あ、あ」

もっ、もっわたし我慢できない。

きもちいいのがまんできないっ、からっ！

カリっ

「い、いーーーーーっ！」

いたい！

胸の先を痛みがまた走って。

噛まれて、ギョツて捻られて。

同時に、両方の乳首をいじめられて、わたし、わたし……
いつちゃった。

お姉ちゃんに、胸だけでいつちゃったんだ。

お姉ちゃんに痛くされて胸だけでイカされちゃったんだ

……。

§

まだ胸の先の熱と痺れるような快感の余韻が残っていて、
わたしはただぼーっとお姉ちゃんのなすがままにされてい
る。

「胸だけでいつちゃうなんて、溼の身体ってえっちだよ
ねえ」

それはわたしのせいじゃなくて、お姉ちゃんのせいじゃな
い……お姉ちゃんが巧すぎるんじゃないよう、と、わたしは
心の中で抗議する。

「可愛くて、えっちで……大好き」

わたしもお姉ちゃんにされるの、大好き。

お姉ちゃんにされていると、気持ちよすぎて身体に力が全
然入らない。

ちゅ、ちゅっ、ちゅっ

お姉ちゃんの舌が右手、左手、腕、ひじ、手首をなぞり、

手の甲にキス。

指先を一本一本しゃぶられて。

手のひらをべろーっと舐められて、手首の静脈、ずっと血
管に沿って唇がのぼってきて、脇の下、汗も全部綺麗にべ
ろべろされて。

あばらに沿って、おへその穴の奥、パジャマのスポンもそ
の動きに合わせてすり下ろされて、下腹、腰。

「下も脱がすからね」

わたしはもう逆らうことなんてできない。考えられない。

「脚、開いて」

お願いする声は、命令のようにも聞こえて。

わたしの心を縛り絡め捕るように。

「少し腰をあげて」

両足を持ち上げられて、下着を抜き取られて、そのままつ
つと太股の内を舌が這う。ひざの裏のくぼみ、ふくらはぎ。

持ち上げられた脚が曲げられて、足首、いつもお姉ちゃんが
お風呂で綺麗に擦ってくれるくるぶし、足の指、折り返して
足の指、逆の内腿に降りて。

わたしはいつの間にか腰をお姉ちゃんの膝に乗せるように
して『く』の字』から『M』の字』に恥ずかしいところをさらけ
出されている。

お姉ちゃんが目、わたしの恥ずかしい所を見つめている
のが感じられる。恥ずかしくて、恥ずかしくてたまらなくは
ずかしいのに、わたしは期待している。

見られているのは恥ずかしくて嬉しい。恥ずかしくて気持
ちいなくて。

おかしい、おかしいよ、わたし。

わたしのえっちなところお姉ちゃんに見つめられて気持ち

いいなんて。

息がかかる。

「溼のここ、きれいな」

「かぁと、顔が熱くなる。」

「薄紅色の、ワレメね。」

少し開いて、息してるみたい」

堪らなくなつて、両手が顔を覆つて。

「いや、あ」

くいくいと、ひっぱられる。

わたしのえつちな毛を、お姉ちゃんの指がくるくると弄つて、

ひっぱつて遊ばれて。そのことがさらに恥ずかしいという気持を加速させていく。

「そんなの、ひっぱらないで……お願い」

「いや」

(っっ！)

クンッと強く引つ張られた。

「いたいっ」

涙が出る。痛くて恥ずかしくて声が出る。

そしたらまた優しく弄ばれる。わたしのあその毛は、お姉ちゃんのおもちゃになつてることが悲しくて恥ずかしい。

いじられる度に、ずくと、その毛の下にあるワレメの場所が熱くなつてきている。

きつとお姉ちゃんにはバレている。だからこつやつて弄つてじているのだと分かる。いじめながら、あそこが疼き出すのを観察している。息がお尻にかかっているから、ほんとうにすぐ間際で見られているんだと。

はあ、はあ、はあ、とわたしの息。

鼓動が高まつている。待ち望んでいるものが、触れることを。

暖かな息がお尻からあそこに移り、吹きかけられる。

生暖かい息、そして、唇が唇に、触れた。

「ん、はあ」

キス、わたしのえつちなワレメに、唇に、お姉ちゃんの唇が、

触れて。わたしの上の唇に何度も何度もキスしていた唇で、

わたしの下の唇にキスをしている。とてもとってもいやらしい唇に、

女の子の一番大切な場所に、直接、キスされちゃつて。

信じられないような、けれどそれは現実で。

あつくねつとりとした、これがお姉ちゃんとわたしの現実。

唇が離れて。

もつとして欲しいと思った瞬間、別のところにキスされて。

また声を上げてしまつ、一番敏感な場所。わたしがひとりであつちした時に、一番好きだった一番弄つていた場所。小さな肉の芽、突起。クリトリス、そこにキスされた。舌で舐められた。

舌で転がされて、皮が剥かれて、直接舐められてる。

「んあ、あ、あーっ」

今までで一番はしたない声。

こんな声、いやなのに。

でも我慢できない、敏感なところを舐められて弄られて転がされてなめられてなめられてなめられて、お姉ちゃんがわたしのあそこに顔をうずめながら舌で遊ばれて。

ちゅ、ちゅう、ちゅう
ちゅう、ちゅう、ちゅう

あつくて、あつくたつてきているわたしの下半身のあそこ、えつちな場所。

身動きがとれないように抱え込まれて、お姉ちゃんの顔の唇と舌が蠢いて、わたしは身をよじりながらき気持ちいい声を上げる。気持ちよくて気持ちよくて、狂っちゃいそうなのに気持ちよくて、自分でするよりもお姉ちゃんにされているのが、こんなにも気持ちいいなんてしらなかつた。声を上げる。涙が出る。だってキモチイイから。苦しいほどに息がつまるくらい気持ちイイ。

お姉ちゃんの唇がもう一度下の唇にいつの間にか移って、そこに舌が差し込まれて中を犯されてるのに気づいて。怖くて自分では指の先ほんのちよっとしか挿れたことがないのに、今はお姉ちゃんの舌がそれよりももっと奥まで入り込んでいます。わたしの中にお姉ちゃんが入っている。わたしの奥を確かめ、味わっている。

また離れて、今度はじゅるうと下品な音。

「ふあ、や、そんな音、やだあ」

わたしのえつちな汁を嘔っている、お姉ちゃんの口が。そしてまた舌が挿れられる。

クリトリスも指でころころと弄られて、わたしのあそことわたしのあそこがまるで別のいきものようにつなぐねとつながりながら、堪らない快感を溢れさせ、もっと深い所でこねられて身体中に送り込んで、血液の代わりに快感を巡らせているように、あついあつい熱を帯びてどくどくどくどく、び

くびくびくびくとはねて震えて。

「ひ、い」

もう、もうわたし、こんな我慢できない。

いく、いくの。

わたし逝くの。お姉ちゃんにされていつちゃうの。

「いい、いい、あ、あは、は、ひゃ、おね」

いくの、いくの、きもちよくていつちゃうの。いつちゃうよ。

にゆるにゆる、ぬちゅ、ぬちゅ、ぐるぐく、くる、くる、くるう、くるう。

くるしくて、あつくて、涙がでるくらいに気持ちよすぎて、

くるの、クルうの、いつちゃうの。

いつちゃう、いつちゃう、きちゃう、いつちゃう、いつ

ちゃう、いつちゃう。

おねえちゃん、いつちゃう。わたし、わたし、わた、わたし、

し、くふ、い、ひ、いつちゃ、いく、いく、いくいくいくいく

くいくいくいくいくいくうーっっっ！

……気がつくど。

わたしの顔のすぐそばにお姉ちゃんの気配があった。

手を握って、わたしの息が落ち着くのを待つように、時々まちゅつちゅつと頬や唇に触れている。

起きていても気を失っていても、わたしはお姉ちゃんにキヌされるんだね、と、ふとそんなことを思った。少し嬉しい気持ちになる。

「気がついた？」

「ん」

耳の傍に唇が寄せられて。

オモイビト

「いつちゃった？」

「うん……お姉ちゃんに、いかされ、ちゃったあ」

「嬉しい」

そうして、耳たぶを軽く噛まれて、舐められる。

ピクンと震えて、掠れ声が出る。

身体はまださつきの余熱がかなり残ったままで、わたしはまだまだ敏感すぎるぐらいにお姉ちゃんを感じられる状態だった。それにまだ、あつくどろどろとしたカタマリが下半身のおなかの奥の方で渦巻いているような感じがする。こんな感じは一人でした時には全然無かったもので、多分これが本当に『欲情してる』という状態なんだろうなと、はつきりしたようなしなないようなまだぼんやりとつなされた頭で考える。

部屋の中の熱さも、ねっとりとした空気の淀みも甘い匂いもなぜか強くなっているようにも感じられるけれど、それは今のわたしにとって心地よいものに思えた。

お姉ちゃんの片手がわたしの胸をさわさわと弄っているのが心地よく。

お姉ちゃんの脚がわたしの片脚を絡めようと腰をすり合わせてきた時に……何か違和感があった。

§

ナニか、固くてあついものが、わたしの腰に当てられている。

弾けるような弾力があるあついナニか、太い棒のようなナニか。

押しつけられ擦られているナニか。

それを感じて、わたしは。

「お姉ちゃん……」

「気づいてくれたの、溼」

本当に嬉しそうに綻んだお姉ちゃんの声。

「ねえ、溼」

「コレがナニか、わかりたくない？ 触ってみたくない？」

「え？」

ナニか怖いほどに歪で不思議なものが溢れ始めたように思えた。空気の淀みがよりひどくなっていくようで、恐ろしくなる。

絡められた脚、腰に当てられた違和感の元がもつともつと擦りつけられる。弾力で跳ねて、おなかの上に跳ね上がる。そしてまた擦りつけられる。

甘い匂いも強くなつて。

「触って、溼」

お姉ちゃんが耳元で囁く。

「触ってくれたら、教えてあげる」

首筋、耳たぶ、耳の中、ちゅうちゅうを吸われて、舐められながら。

胸を撫でるように優しくされていたのを、きゅっといきなり摘まれる。

「きゃうん、ん、ん、ん、ん」

熱にうなされたようなはつきりしない頭では、甘い匂いと艶を含んだ声に、わたしはもつ逆らうことができない。

「触って」

怖い、怖いと頭の片隅で何かか呟いているよつで、一方では触りたい、触りたいという声も聞こえる。あるはずのない

ナニかに触れてしまつこと、知つてしまつことへの恐れ。まったく同じ双子のはずなのに、わたしには無くて姉にはあるもの、あつてしまつモノ、ナニか。

手をゆつくりとおそろおそろの伸ばして行く。

わたしの肌を擦りつけられ触れているナニかも場所へ。

それは私のおなかの上で、今はじつとして居る。じつとしているのに、ドクドクと小さく脈打っているのがわかる。

近づくと、もう少しで触つてしまつ。

中指を伸ばす。

「あ」

触れた。

触つてしまつた。

指の腹に触れる柔らかいもの。

びくつと指を引つ込めて、もう一度おそろおそろの触る。

指の先でその形を調べる。

熱くすべすべして、そして先にワレメがあつて、親指で裏みたいに思える所を触ると、襷のようなものもあつて。

「ん……」

お姉ちゃんの吐息。

わたしは親指と中指を滑らせて行く。すると括れがあつて、そこから少しざらざらとした皮のような感じがあつて。

わたしはもう一度指を離す。

そして今度は、縦の長さに沿つてすっぽり覆つよつに手のひらを被せた。

ゆつくりと滑らせていく指先に、お姉ちゃんの陰毛を感じて、

中指の先でそれを少しだけ弄る。

これはお姉ちゃんから『生えて』いるんだと、理解できた。

ドクドクと脈打つあついカタマリは、間違ひなくお姉ちゃんから生えていることに、わたしは恐ろしくなつた。その一方で、これがお姉ちゃんのものであることがわたしを安心もさせた。

「漣、こつちを向いて」

お姉ちゃんの声のままにもぞもぞと動いて、お姉ちゃんと同じ合つ。

抱きしめられる。脚が絡められる。

おなかに今わたしが触つたものが押しつけられ、反り返つてその存在を強く主張している。

応えるようにわたしもお姉ちゃんの背に腕を回し、脚を絡めた。

柔らかなお姉ちゃんの胸とわたしの胸とが合わさつて、ふにゅと形を変える。

わたしのおなかで、お姉ちゃんのソレが苦しうにしているのがわかつた。

お姉ちゃんの『おちんちん』。

ありえるはずのないものが、いまのお姉ちゃんにはついている。

あついあついお姉ちゃんのおちんちん。固くて柔らかくて脈打つている、生きている、ほんもののおちんちん。

柔らかい女の子の胸があるのに、固くてゴワゴワしたおちんちんもある。

夢なのが現実なのか、もうわたしには分からなくなっている。

どうしてという疑問は甘い匂いにかき消され、あつく淀んだ空気が朦朧とさせ、お姉ちゃん息づかいが私の頭を痺れさせる。そしてすくすくんとわたしのあそこが強く強く熱を持ち始める。

ぐるぐるぐる、思考は回る。

お姉ちゃんのおちんちん、お姉ちゃんのおちんちん、お姉ちゃんのおちんちんおちんちん。

ぐるぐるぐると回る言葉に、お姉ちゃんお声が重なって。『溼と一つになりたいて願ったの。』

あの刻、一つになれなかったその代わりに。もう一つ別の方法で、二人が一つになるために『かみさま』が私にくれたの。

『紅い夢の夜』に一つになるために。二つに分かれたものが、もう一度一つになるために必要なものだって。』

紅い夢。

紅い夢の夜。

紅いわたしのワレメ。

紅いお姉ちゃんのおちんちん。

『もう溼も分かっているんでしょ、今日がその夜だって待ち望んでいた、夜よ』

二人を結ぶのは、鮮やかな紅い血の色をした糸。

『溼、一つになる。』

ずっと一緒にいてくれるよね。

私も、溼を一人にしたりしない。溼はあの時も約束を守ってくれたから。私もぜったいに溼の手を離したりしない、

ずっとずっと一緒だから。

一つになるう、溼。

一つになれるのよ、溼。

こんなに嬉しいことないから、ねえ、溼」

お姉ちゃんと一つになる。

それがお姉ちゃんが望んでいたこと。

わからない、わからない、わかりたくない、ワカリタイお姉ちゃんの気持ち、わたしのきもち、お姉ちゃんの望み、わたしのぞみ、のぞみ、ノゾミ、望み。

あつく、熱く熱く熱く、わたしの中で渦巻いている熱と望み。口を開く、でも言葉がでない。はあはあはあと、荒い息が漏れる。唇が乾く。舌で舐める。

望み、望まれていること。わたしがここにいる意味。お姉ちゃんといっしょにいるということ。お姉ちゃんとの約束、わたしの約束、おねえちゃんのやくそく。やくそくと、のぞみ。

二つに分かれたものが、もう一度一つになるため。ああ、わたしは、お姉ちゃんと……。

わたしは、お姉ちゃんと、一つになりたい。

瞬間、世界から音も熱さも匂いもなにもかも消えて。

わたしは声に出さないで、答えた。

お姉ちゃんは、声に出さないで、応えた。

ひとつになる、溼。

そして、世界は紅く染まる。

S

わたしは、お姉ちゃんを待っている。

わたしの大切なものをお姉ちゃんに捧げるために。

大きく脚を広げ、お姉ちゃんを迎え入れて一つになるために。

わたしの間にはお姉ちゃんがいる、わたしのワレメにはお姉ちゃんのおちんちんが当てられていて、くにゆりにゆりに、お姉ちゃんのおちんちんをお先でこねている。

じわりと、甘い匂いとあつさと淀みが濃度を増す。わたしとお姉ちゃんの興奮が高まるのに合わせているみたいに、じわりとわたしのワレメからえっちな汗が滲み出て、お姉ちゃんのおちんちんを濡らす。濡れて、なじませる。

それはすべて、熱くて恐ろしいあるはずのないものを受け入れるため。

くぬぐと、遂にわたしの中にお姉ちゃんが入り込もうとしてきた。

「あ、あ」

脈打つ紅く熱い肉のカタマリが、わたしの触れて確かめたおちんちんの先が、わたしのワレメをみりみりと割り開いていく。

「く、はっ」

痛い、痛くない、いたい、イタイ。まだ全然はいつてないのに、いつばい濡らして馴染ませてくれたのに、どうしてこんなにも痛いのだろう。

お布団の端をギョツと握って耐える。脚がひきつく、身体が強張る。

「力を抜いて、ね、溲」

掠れる、なにかを我慢するようなお姉ちゃんの声。

でも、お姉ちゃんはそのうけけれど、とてもそんなこと無理、わたしの中に入ってこようとするとするものを、私の身体は許そうとはしていないよう。

「で、ない、無理……おねえ、ちゃん」

「そっ、なら……」

お姉ちゃんはおわたしの腰骨のあたりを掴んだ。

逃げられないようにするため？ 逃げられないようにするために。

逃げられない、わたしはお姉ちゃんから逃げられない。

また強く、お姉ちゃんが押し込まれる。

「ひいっ」

痛みが悲鳴を上げる。

じんじんと、痛みが頭を支配している。

そしてその痛みの端の方に、わたしの入り口にお姉ちゃんのおちんちんの先が、先の部分だけ入ってしまったことを感じていた。

入ってる、入り口だけだけど、お姉ちゃんのものがわたしの中に。

痛みが緩やかなものに少しずつなり、代わりに嬉しいという気持ちが生まれてくる。それはまだほんの最初の段階だというのわかっていけるけれど、でも嬉しいという気持ちは止

められなかった。

「……わかる、溼？」

「うん、わかる、よ。」

わたしの、入り口に、お姉ちゃんが、入ってる……」

「痛い？」

「痛いけど、嬉しいから大丈夫」

「これからもつと痛くなるけど、我慢できる？」

「我慢する。お姉ちゃんとわたしのためだもん。我慢できるよ」

「……ありがとう、溼」

お姉ちゃんのおちんちんの先が、わたしの純潔の証に触れている。

こんなにもはつきりとわかるものなんだって、不思議に思っ
どうしてわかるんだろう、どうして感じられるんだろう。

なにもかもが、ソコに集まってきてる。痛みも、きもちよ
さも、感覚も、自分のココロも、お姉ちゃんの気持ちも……

この夜のあつさも、狂ったようなあつさもなにもかも。

大切な証を求めて、ソコにきている。

お姉ちゃんはまだそれを破るようなことをせずに、入り口
を先っぽだけで愛撫してくれている。それはこれからすぐに
訪れる痛みにも少しでも耐えられるようにするためのものなの
だとわたしは思っ、そのにゆるにゆるとした浅い動きにだ
け身を任せて。痛みはあるけれど、我慢できないことはないとい
気持ちいいんだとそう考えて。

「もう、大丈夫だから、お姉ちゃん。」

いいよ、わたしの初めて、お姉ちゃんにあげるから。

「……きて、お姉ちゃん」

「溼」

ぐうっと圧力がきた。

痛みがもう一度わたしを支配した。

わたしの初めてを破るために、お姉ちゃんのおちんちんが
わたしの初めてに押しつけられる。ゆっくりとゆっくりと押
し破るための力で、引き伸ばされる。

痛みが、引き伸ばされる。

まだ破れない。

痛みが引き延ばされる。

お願い、一思いに、破って、お姉ちゃん、破って！

声にならない、痛みで頭がチカチカする。

ひきつるような息が漏れる。

でもまだ破れてない。

痛い、痛い、いたいたいイタイ。

お布団をずり上がって逃げようとするけれど、逃げられな
い。

お姉ちゃんは、わたしの逃げるのを許してはくれない。

痛み、痛み、いたみ、痛い、いたい。

ブツッ

「！」

ああっ、破れた、破れてる、破れて押し入ってくる。押し
入られる。

切り裂かれる。切り裂かれる痛み。

わたしの中をお姉ちゃんのおちんちんがずりりと切り裂い
ていく。

固く閉じられたワレメの奥を直指して、みりみりと肉を切

り裂きながら、凶悪なカタマリが押し入ってくる。お姉ちゃんなのに、お姉ちゃんでないもの、あるはずのないモノ、お姉ちゃんのおちんちんが。

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い。

いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いたい。

イタイ、イタイ、イタイ、イタイ、イタイ、イタイ。

「ああ、あ、ひたい、いたい、いたい、いたい」

涙がこぼれる、ぼろぼろと、あまりの痛みが遠くなり

そうなるのに、いつそ気を失ってしまえればと思うのに、

それができない。

わたしは痛みから逃げることも許されていないの？

お姉ちゃん、助けて、助けて、助けて。

たすけてお姉ちゃん、いたいよ、いたいよう。

まだ届いていない。

まだ許されていない。

わたしが待っている場所に、お姉ちゃんはまだ辿り着いて

いないから。それまで、この痛みは終わることは決してない

のだと。

まるで『痛み』が世界を覆い尽くすよう。

逆くまでに絶対に必要なものは『痛み』。痛ければ痛いほど、

痛みを感じるものがわたしの役目のようで。

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い。

「おねえちゃん、いたい、いたいよう」

そうして、気の遠くなるような痛みの果て、遂にお姉ちゃん

がわたしのもとへ辿り着いた。

痛みの中で、こつとなにかがわたしの奥底に届いたと、

分かったから。

「迎えにきたよ、漣」

お姉ちゃんの声が響く。

痛みに痺れる頭の中でこだまする。

ああ、やつと届いたと、わたしはそのことに安堵して涙を

流した。わたしはお姉ちゃんをちゃんと最後まで受け入れら

れたんだと、一つになれたんだと分かって。

「痛い？」

「うん、うん」

ぐずぐずと泣きながらわたしは答える。

答えることで、少しでも痛みから気が紛れるかもしれない

から。

「ずくんずくと、切り裂かれた痛みはまだ収まらない。大

きな息を繰り返す。息をする度に、つうん違う、お姉ちゃん

のおちんちんがどくんどくとするのに合わせて、痛みが波

のようにやってくる。

お姉ちゃんはおちんちんが、わたしの奥の奥まで入って

いることが感じられる。

わたしの中はお姉ちゃんがいっぱいになっている。もう迷

れられない姿で、貫かれ、破られ、辿り着いた。

動かないでいてくれるお姉ちゃん。

けれど、おちんちんの疼きがわたしに伝わって、それが痛

みに変わってしまう。

まだ痛くて痛くてたまらない。けれど少しだけ、ちよつと

だけましになったようにも思える。お姉ちゃんがうごかない

でいてくれるから今は我慢できる。

「お姉ちゃん」

「なに」

「手、握って」

わたしは掴んでいたお布団を放して、お姉ちゃんの方に手を伸ばした。お姉ちゃんが手を握ってくれたなら、きつと痛みがもつとひいてくれるように思えたから。

腰に当てられていた手は、かわりに手のひらに重ねられ、ぎゅつと握りしめ、縫れ絡められた。たったそれだけでわたしは本当に幸せだと思えた。痛みも一瞬忘れられるくらいに。

しばらくそうしていた。

お姉ちゃんと一つになつたまま、手を絡めあつて、ただお姉ちゃんに見つめられて、わたしも見えない目でお姉ちゃんを見て、静かなそれだけの時間に幸せを感じて。

けれど、ずっとそうしていられたらとも思つたけれど、お姉ちゃんのおちんちんが、どくんどくんと我慢できないつていうことを伝えてきているのが分かつたから、わたしはお姉ちゃんに言ったの。

「いいよ、お姉ちゃん。」

お姉ちゃん、動いて、お姉ちゃん気持ちよくなって、いいよ。」

痛みは収まってきた。

なにより、わたしはお姉ちゃんに気持ちよくなってもらいたかつた。

今のわたしがお姉ちゃんにしてあげられること、許してあげられるのはそれだけだつて知っているから。

女の子の『初めて』が痛いだけで気持ちよくなつてなれないつていう話はわたしでも知っていること。でも男の人……じゃないけれど、今のお姉ちゃんならずっと気持ちよくなることはできるはずだつて思つたから。

そんなわたしの思いは、お姉ちゃんにちゃんと伝わつたよ

うで、ただ一言、

「大好きよ、漣」と答えてくれた。

そうして握っていた手を放して、わたしの太股を押さえつけるように開いた。

わたしは、お姉ちゃんに与えられる痛みにも耐えられるよう、もう一度お布団の裾をぎゅつと掴んだ。

ずるうつと、わたしの中からお姉ちゃんがぐつくりと抜けていく。

痺れるような痛みが強くなるけれど、我慢できないほどじゃない。おちんちんの太いところが、わたしの身をひつかいていくのがわかる。

痛みがくる、でも大丈夫、だいじょうぶ、我慢できる。

抜けていく感覚。わたしとお姉ちゃんはせつかく一つになれていたのに、それが引き抜かれて、また二つになつてしまふという喪失感がやつてくる。中を擦られる痛みよりも、なぜかそのことが悲しく感じられて。

はじめてのあつた場所を擦られて痛みにも身体が跳ねる。

くうつと声が漏れる。

血の匂いが部屋の中に混じる。鉄の匂い。

わたしのはじめての証、その匂い。わたしのワレメからお尻にかけて、紅い血が流れ落ちてきているの？

お姉ちゃんの指が、その筋に沿つて触れて。

「漣、初めての血の味……」

うつとりとした声。わたしの血の味の酔っているよつな

声。

そして今一度、わたしの中にお姉ちゃんが押し入つてく

る。

痛い、痛い、わたしは再び襲いかかってくる痛みに耐える。

お姉ちゃんのおちんちんが、また入り口をくぐり抜けて、最後の場所までやってくるまで。

割り開かれる痛みは、一度や二度では絶対に慣れることなんてできないものだ。わたしは理解した。

こんな痛みの往復を、わたしは何度耐えればいいのか？

そんな思いがわたし頭の聞こえる。押し入れられる痛みと、抜けていく時の喪失感。いつたいつそれが、わたしの中で純粋な悦びに変わるのだから、そんな時は永遠にこないのかもしれない。

でも、お姉ちゃんは気持ちよくなっている。

だって、そうでなければどうしてこんなにも何度も何度もわたしの中を犯すのかわからない。キモチイイから？ きもちいいから。

お姉ちゃんが気持ちいいなら、わたしは我慢できるよ。

お姉ちゃんの一つになっているから、我慢できるよ。

痛い、痛い、痛い。

歯を食いしばって我慢する。

痛みがやわらいでくる、痺れて慣れて痛みが痛みだとわからなくなるまで、頑張るしかない。

お姉ちゃんは、おちんちんでわたしの中を何度も犯す。

お姉ちゃんの息が荒くなっているの。きもちいいって、声に出すかわりに、何度も何度も、吸って吐いて。

お姉ちゃんが息をする度に、おねえちゃんが動く度に部屋の中の甘い匂いとあつさが増す。空気の淀みがもつともつと

濃くなっていくような気がする。

そして、黒闇しかわからないはずのわたしの世界が、なぜか紅く染まってくよに感じられるの。

「お、ねえちゃん、きもち、いい？」

わたしはお姉ちゃんに訪ねる。

気持ちいいなら、ちゃんとそう言って欲しい。お姉ちゃんの心はわかるけれど、それだけじゃない言葉も欲しい。きもちいいってわたしのなかを犯す度にそういつて教えて欲しい。それだけがわたしの悦びに違いないのだと。

「みお、溇。

きもちいいよ、溇の中、とつても、きもちいいの」

わたしの願いに応えて、お姉ちゃんは声を出してくれた。入ってくる、抜かれていく。擦られる。

割り入れられて、割り裂かれて、失われていく。

その度に、お姉ちゃんは悦びの声を上げる。

きもちいいよ、きもちいいよ、幸せなほどキモチイイよと。

嬉しい、うれしいよ、お姉ちゃん。痛くてつらくても、うれし。

お姉ちゃんの声はわたしにとって痛みを打ち消す麻酔のよなものだった。この声が聞けるなら、どんな痛みだって我慢できると。

お姉ちゃんの声が響く。

きもちいい、きもちいいと。

お姉ちゃんの声が響く。

みお、みおと、わたしを呼ぶ声が。うれしくて、うれしくて堪らない。

じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ

じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ

声に合わせて奏でられる、わたしとお姉ちゃんのいやらしい交わりの音。

一つになっっていることを示す、おちんちんがワレメの中を出たり入ったりして、お姉ちゃんのおそこがわたしのあそこにあたって、ペチペチと鳴っている音。

その音楽をバツクに、お姉ちゃんの声が歌声のように聴こえる。

わたしはいつか、歯を食いしばることをやめて、同じように、「おねえちゃん、おねえちゃん」と声を上げ始める。

わたしとおねえちゃんは、一つになっただけを歌う。

紅い〃〃夢の世界の、甘く熟れてあつく淀んだ空気の中で、一つになっただけの歌を歌う。

「あ、あ、あ、あ」

淀みの世界に高く響く喜びの声。

お姉ちゃん、お姉ちゃん、おねえちゃん、お姉ちゃん。

好き、好き、好き、スキ、うれしい、痛い、いたくない、いたい、イタイ、きもちいい。

ふたり、ひとつ、なる、いっしょ、やくそく、きもちいい、おねえちゃん、おねえちゃん。

高みへ、高みへとのぼっていく。

「あ、あ、あ、あ」

うた。

うれしい。

いたい。

喜び。

いっしょ、いっしょ、ずっと、いっしょ。

おねえちゃん、お姉ちゃん、おねえちゃん、わからない、わかる、わからない。

みえない、みえる、ちょう、あかい、おねがい、ゆるして、ゆるして。

おねえちゃん。

おねえちゃんのが、わたしのてをにぎる。

おねえちゃんのがおが、わたしのかおのそばにくる。

あれ、あれ。

おかしいな、おかしいよ。

おねえちゃん、いま、わたしのあしをかかえて、わたしのなかをいっばいいっばいにくれてるのに、どうしておねえちゃんのは、わたしのてをにぎっているの？

おかしいな、おかしいよ、わからない、でもあんしんなの。

おねえちゃんがわたしにきずをする。

くちづけ。

わたしはおねえちゃんのものだから。

おねえちゃんはずたっている。

うたっているのに、わたしのくちびるをふさいでいる。

きもちいい、きもちいい。

おねえちゃん、きもちいい。

あつい、からだ、あつい、くちびる、むね、て、て、あし、

おしり、あそこ、あつい。

あつい。

わからない、きもちいい、ずっと、きもちいい。

いい、いい、いくの、いくの、わたし、いくの、おねえちゃん。

ん。

いく、いくいく、いっっちゃう、いっっちゃう。

わたし、おねえちゃんひとつになつて、いっっちゃう。

きすされながらいっっちゃう。

てを、てを、てつないで、いく、いくの、くるの。

くる、きっちゃう、いっっちゃう、いっっちゃう。

おねえちゃん、おねえちゃん、おねえちゃんおねえちゃん。

ん。

おねえちゃん、おねえちゃん、いく、いく、いくいくいく
逝くいくいく、いいーっ！

しろい、しろい、はてのしろとあか。

とんで、白く、いくの。

そして、紅く、そまる。

わたしのなかに、おちんちんがふるえて、しろいなにかが
ながれこんでくる。

かさねられたてから、おねえちゃんじゃないひとのおもい
がながれこんでくる。

ああ、ああ、わたし、わかつたよ。

声がきこえる。

まって、おいてかないで。

もう、おいてかないですよ。

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

ずっといっしょだつて、やくそくだから。

おねえちゃんはかならずもどってくる。

『やえおねえちゃん』

声が聞こえた。

「漣、みお、大好き」

ああ、ああ、わたしは求められているの。

繭お姉ちゃんと、そして……

……紗重に。

白い顔の小さな悲しそうな笑顔の、双子の妹に。

§

あれから、一年。

暑い季節が再びやってきている。

つけばなしにしているテレビからは、水不足の情報や高
校野球の結果とか、夏バテ対策がどつとか景気向上とピー
ルの関係とか、そんな情報が小さな声で流れてきている。

わたしは、クーラーの効いたリビングで、ただぼうつとし
て……。

……ただぼうつとしては、いられなかった。

「漣、みーおー」

「んー」

ダイニングキッチンの方からわたしを呼ぶ声。
お姉ちゃんの困ったような声が呼んでいる。

「この子、なんだかむずがってるの。」

「どうしよう」

なぜなら、今この天倉家には赤ちゃんがいるから。

かわいい女の子の赤ちゃん。

名前は、紗重、天倉紗重。

わたしの大切な、赤ちゃんが産まれたから。

去年、わたしが妊娠していることがわかったのは、あの『紅い夢の夜』。お姉ちゃんと一つになった夜から数えて数カ月後のこと。

お母さんは、それが誰の子かということを開いて詰めることはしないでいてくれた。多分、あの故郷での事件の時に、という風はどこか釈然としないまでも思っていてくれていたからだと思う。

最初は墮ろした方がいいんじゃないかって言ってくれたけれど、わたしはそんなこと考えもしなかった。だってこの子は、紗重は。わたしたち二人以外には絶対に信じてはもらえないけれど。わたしとお姉ちゃんの間に来た子なんだから。

お母さんも「墮ろす」ということには複雑な思いもあるようで、わたしは結局そのまま学校をやめて育児に専念することになった。学校には「失明のため学校を変える」という説明にしておいたのには、ちょっと苦笑するしかない。

それと、お姉ちゃんも本当はわたしと一緒に休学したかったみたいだけど、さすがにお母さんが、ついでにわたしからも絶対にダメと反対されてあえなく撃沈。今も普通に元気に学校に通っている。

そう、お姉ちゃんはあれから、以前よりずっと明るくなった。

わたしのことを大事にしてくれるのは変わりないけれど、おどおどしてわたしにいつも頼ってはかりいるようなことは無くなった。

一度「お姉ちゃん、変わったね」と言ったら、「だって、私も頑張りなきゃね」と笑って答えてくれた。その声から伝わってくるお姉ちゃんの良い笑顔のイメージがとてと眩しく感じられて、わたしはお姉ちゃんのことからもうとと好きになった。

そして、秋が過ぎ冬になり、だんだんとおなかが大きくなって、赤ちゃんの心音が聴こえるようになって、春が訪れて。

初夏に紗重が産まれたの。

「溇、この子、おなかすいてるんじゃない？」

わたしの傍までやってきたお姉ちゃんが、よーしよしと紗重をあやしながら言う。

「じゃあ、お姉ちゃんがお乳あげてよ」

「ぶー、わたしお乳でないもん。」

さ、紗重ちゃん、お母さんにおっぱいもらいまちょうねー

そう言うつと、お姉ちゃんは抱いていた紗重をわたしの胸にあずけてきた。

仕方ないなあど苦笑して、胸を半分はだけて、あらわにした乳房を小さな口に含ませる。

ちゅうちゅうとおいしそうに飲む赤ちゃんの温もり。

わたしとお姉ちゃんの間に来た新しい一つの命。

『わたしの妹』の名前をもらった赤ちゃん。

この子は悲しい思いも辛い思いもせず幸せに育って欲しい。

そのために、最後の紅い蝶はわたしとお姉ちゃんに命の繋がり
りを託したのだと、わたしはそう信じてるから。あの『紅い
夢の夜』に、わたしは暗闇という名の籠もりお姉ちゃん
と一緒に永遠を描き、その永遠は未来へと続く小さな一つの
命に姿を変え、芽吹き花開いたのだと。
幾度と無く繰り返された悲しい運命の夜は終わり、未来が
わたしたちの前にはあるのだから。

おながいっぱいになつたのが、紗重は口を胸から離して、
あぶあぶと声を上げる。

抱き方をちよつと変えて背中をぼんぼんと叩いてあげて。

「おながいっぱいになつたから、寝ちゃうかな」

「だつたら、楽でいいんだけどね」
わたしはもう一度紗重を胸に抱くと、小さな声で子守歌を
歌う。

ねんねん、ころりよ、おころりよ。

紗重はよい子だ、ねんねしな。

テレビの音はいつのまにか消えていて。

お姉ちゃんが消してくれたんだらう。

わたしの唄声に、同じようにお姉ちゃんの小さな唄声が重
なつて。

ねんねのお守りは、どこへいた。

あの山こえて、里へいた。

里のみやげに、何もろた。

でんでん太鼓に、笙の笛。

安らかな眠りの中で、この子はどんな夢を見ているのだら
う。

たとえどんな夢だとしても、あの紅い蝶の夢ではないと
わたしは思う。二つに分かれてしまったものは、今はもう、
たった一つの命となつて、『ここ』にあるのだから。

ねんねん、ころりよ、おころりよ。

常
く
に
ち
じ
ょ
う

「……お姉ちゃん」

「ん？」

「……なんでもない」

「うん……」

わたしは最近、お姉ちゃんと一緒にただこうしてリビングのソファの上でぼーっとしていることが多くなった。

お姉ちゃんと肩を寄せ合い、手を繋ぎ合って、ただそこにいるだけ。

なにか考えているようで、でもそれは取り留めの無いことで、次の瞬間にはすぐに忘れてしまうようなことばかり。音量を絞って付けてあるだけのテレビから聞こえるニュースやドラマも、そんな思考の揺らぎにまぎれてしまうような他愛も無いノイズにすぎなくて。

ただただ、お姉ちゃんと同じくして寄り添っていることに安らぎ。幸せを感じられる。そんな時間がわたしを満たしてくれている。

それがわたしにとっての『日常』になっていた。

少しだけ、お姉ちゃんに寄りかかるように頭を傾げる。

するとお姉ちゃんも少しわたしの方に頭を傾けて、繋いだ手を軽く握りなおして。

びたっと合わされた腕や脚から伝わるお姉ちゃんの温もり、時折もぞもぞと動いて肌が擦れ合う感触、ゆるやかな呼吸のリズム、吐息、頬にかかるさらさらの髪。そしておねえちゃん、の匂い、大好きな匂い。

わたしの側にある全てが、わたしを優しく包み込んでいて

くれることがわかって安心できる。わたしにはお姉ちゃんがいる、そのことがわたしを救ってくれている。

こんな緩やかで幸せな気持ちでいられるなんて、とても不思議で、とても嬉しくて……でも、今はもうそうでない自分なんて想像できなくなってしまっている。

嬉しくて、暖かくて、安心できて、どこか少しだけこそばゆくて。

……だからわたしも、お姉ちゃんの手を握り返す。

一度絡められていた指をほどいて、重ねあわされていた手のひらを滑るように反して。お姉ちゃんの手の甲を指先でなぞりながら、人差し指で小指と薬指の谷間を、中指で薬指と中指の谷間を……そうやって次々にお姉ちゃんの手と指のさわり心地を愉しんで。指を引いては谷間を、下ろしてはお姉ちゃんの手先の指の先、爪のなめらかさを感じて。

そうして、もう一度わたしの手はお姉ちゃんの手の下へと滑り込む。お姉ちゃんは自分の手を弄んだけない妹の手を、もういたずらは許さないという風に強く握り締めてきて、わたしもそれに応えるように握り返す。

これは、わたしたち二人のいつもの遊び。

これは、わたしたち二人の秘めやかな合図。

わたしは傾けていた頭を起こすと、お姉ちゃんの方へと向き直る。

空いていたもう片方の手を何かを探してさまようように持ち上げると、わたしの望みに応えるようにしてお姉ちゃんの手が触れてきて、そうして絡めとられ繋がり合っ。

温もりが、すぐ側までくる。

大好きな匂いが、すぐ側まできている。
お姉ちゃんの温かさと匂いが、わたしの鼻先にまで近付いてきて。

だから、わたしは。

首をもう少しだけ傾けて、唇を一度閉じて。

もう一度開いて。

声に出さない微かな声、吐息の囁きのような声で

「お姉ちゃん」

「薄」

重ね合わされる。

くちびる。

ぬくもり。

匂い。

吐息。

ぬれて、こぼれる。

唇と唇が重ね合わされる。

唇と唇とを重ね合っている。

お姉ちゃんの唇と、わたしの唇。

お姉ちゃんの唇が少し離れて、代わりに舌でわたしの唇を舐めてくる。

味わって、押し付けて、唾液をまぶして、やわらかさをやわらかさで舐めとるようにして。わたしの口の周りを全てお姉ちゃんのものにしてしまっ

あこの下にまで、お姉ちゃんが垂れてきてしまっ

わたしの口は、わたしの唇は、お姉ちゃんのものにされてしまっ

わたしは、それが嬉しくてたまらなくなっ

だから、お姉ちゃんにもっともっとわたしを味わってもらいたくて、わたしの中に入ってきてもらいたくて。

だから、わたしは催促するように唇を開いた。

そうして、舌をおずおずと下唇の上に乗せるように差し出す。

「……………」

お姉ちゃんの小さな……小さくおかしそうに笑う声を含んだ息が唇を掠めて。

お姉ちゃんの暖かな息が、舌と口の中に吹きかけられるのが感じられて。

わたしは我慢できなくなって、餌をねだるように舌を突き出す。

びと

……と、そのわたしの舌先に、柔らかな暖かさが触れる。

お姉ちゃんの舌。

お姉ちゃんの舌先だ。

わたしは与えられたそれが嬉しくて、もっと触れてほしくて、わたしのものをもっと押し付けようとする。けれどお姉ちゃんはその動きをかわすように離して、一度かわされてひっこめられたわたしの先を、また追いかけるように触れてくる。

触れて、離れて。

逃げて、追っ

常

互いの舌先だけを、触れ合わせ、つつき合い。舌の先、先のおもて、そのうら、その横を舐めて、踊るように、遊ぶように交わらせ。小鳥達が愛を確かめ合う前の求婚のダンスのように、つかの間の遊びを楽しんで。

夢中になっているうちに、いつの間にか重ねられていた手は互いの背に回されて。

もっと近くに、もっと傍へ。その気持ちとびったり重ねあわされるように、互いに向き合い、抱き合って。

お姉ちゃんの舌が、離れて、少しだけそのままになった。

それはささやかな舌先遊びの時間が終わる、二つ目の合図。

だからわたしは、一度唇を閉じる。
にちゅと、いやらしい感じの音がした。

繋がれていた手が解かれる。

そのまま、わたしの手を添えて、お姉ちゃん手がわたしの頬の上にやってくる。

わたしはその手をお姉ちゃんの手に沿って滑らせる。

お姉ちゃんの手のひらが、わたしの上気した頬に触れて。引き寄せられ、引き寄せて。

唇を開いて、開かれて。
もう一度。

そして今度は、もっと深く。

奪い。

貪り。

侵すために。

深く、重ね合わされる。

わたしの中にお姉ちゃんが入ってくる。

わたしの舌をお姉ちゃんの舌が絡めとり、蹂躪する。
わたしの舌がお姉ちゃんの舌を受け入れ、絡まり合っ。

温かな柔らかなもの。

舌と舌の絡まりあう感触、にゆるにゆるとした交わり。

「ん、んむ……んう」

「む……ん、ん……う」

涎とよだれ、お姉ちゃんのものわたしのがぬちゅぬちゅ混ぜ合わされる音、唇の端から垂れて零れて、落ちる。

ぐちゅ ぐちゅ
にゆる にゆるり

舌とした。

涎とよだれ

息と、といき。

その息を継ぐ間もないほど、わたしとお姉ちゃんは求め合う。
求めて、重ね交わり、絡み合う。

鼻から抜ける息。鼻から入ってくる息。

温かな息、匂いに満たされた息。匂い、におい、お姉ちゃんの匂い。

お姉ちゃんの匂いが、口から鼻にやってきて、わたしの中もお姉ちゃんに満たされて。きつと同じように、お姉ちゃんの中もわたしでいっぱいになって。

お姉ちゃんの涎、おねえちゃんの味。お姉ちゃんの味のよ
だれ。わたしの涎、わたしの味を、お姉ちゃんもいっぱい
味わって。

そうしてわたしとお姉ちゃんは交じり合って、同じ匂いと
同じ味とになってしまつて。

溶けて、交じり合つて、垂れて、流れて。

匂いは広がって、味は混じつて一つになつて。

わたしとお姉ちゃんは、お姉ちゃんとわたしになつて。

二人は一つの匂いと味になつて。

だんだんと、だんだんと、わたしとお姉ちゃんとは一つの
ものになつていくよつで。

同じ匂いの、同じ味をした。

同じ顔の、同じ姿かたちの。

同じ血を分けた、同じ繋がりを持った、一つの卵から生ま
れた二つのいのちが、そうしてもう一度、一つに戻つていく
よつな。

感じられる世界の全ては、ただお姉ちゃんだけ。

わたしの全ては、お姉ちゃんだけ。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃんだけが、わたしの全て。

涙が零れて。

涎が、こぼれて。

ちゅる ちゅる ちゅる

ぬちゅ ぬちゅ ぬちゅ

苦しくて、気持ちよくて。

息ができないほどに、気持ちよくて、うれしくて。

繰り返して、くりかえし、何度も、なんども。

「ふあ……ん、ん……う」

「ん……むふ、んう……ふはっ」

唇を離そうとしても、逃げられない。

唇がはなれてしまつたら、すぐにもう一度かさね合わされ
る。

苦しくて、苦しくて、どんなにくるしくても。

気持ちよくて、気持ちよくて、うれしくて、止めることな
んで出来ない、できるわけがない。

ただ、ただ、お姉ちゃんと一緒に。

ただ、ただ、お姉ちゃんと一緒に、求めあい、むさ
ぼりあつて。

それがこんなにも気持ちよくてうれしくて、それ以外のこ
とをわたしからなにもかも無くしてしまふ。考えられなく
なつてしまふ。

おねえちゃん。

おねえちゃん。

おねえちゃん。

おねえちゃん。

おねえちゃんとわたしは一つになつていて。

くるしくて、気もちよくて、わたしはわたしの、おね
えちゃんだけになつてしまふ。

わたしの中はおねえちゃんだけ、なにもかも、ぜんぶ、ぜ
んぶおねえちゃんだけ。

「ん、んう……んっ、ふひっ」

「んむ……ん……んっ……んっ」

お姉ちゃんの囁きにこたえて。

そうして、ゆっくりとわたしの身体はソファの上に倒されていく。

そうして、わたしはお姉ちゃんを優しく抱き留める。

お姉ちゃんとわたし。

二人の『日常』は、こうやって今日も繰り返されていく。

これからも、変わらずに。

これからも、きつと……。

類
く
ほ
お
く

互いの吐く息が白く見える、クリスマスも押し迫った冬の季節。

コートとかセーターとかマフラーとかホッカイロとかが手放せない十二月。

近くのスーパーでの買い物からの帰り道、人通りも少ない住宅街の中を溍と私は手をつないでゆつくりと歩いていた。

肩に掛けたコットントートのバッグに買った大体のものは入れてあるけれど、空いたはずの私の手には焼きたてタイヤキの入ったビニール袋が一つ。これは家についてからのお楽しみというわけで、つぶあんとかスタードの二種類、二人の意見を尊重した結果。

てくてくてく

コツコツコツ

二人の靴音と、たまに遠くを車が走る音、そして溍が手に持った杖がコツコツと地面を確かめる音が全て。

とくに交わす言葉もないのはいつものこと。

ただ、繋いだ手から伝わる互いの温もりが、私たちにとっては言葉よりなにより大事なものに思えていたから。

私たち二人にとつて、これも大切な時間の一つだった。

てくてくてく

コツコツコツ……

クン、と、繋いでいた手が少し引かれる。

溍が立ち止まったことに気づき、私は歩みを止めて振り

返った。

家に帰ってからやらなきゃいけないこととかで少し考え事をしていたので、いつもよりちょっとだけ反応が遅れたみたい。

「どうかした？」

溍は空を見上げていた。

「ん……」

「お姉ちゃん。

雪、かな、もしかして」

「え」

同じよう空を見上げてみる。

けれど、どんよりとした雲以外にはそれらしいものはまだ見えない。

目を溍の方に向け直すと、同じタイミングで溍もこちらへと向いて。

「うん、ちょっと冷たいのが、ここに落ちてきたから」

歩いているうちに寒さが少し紅くなったように見える頬を、はじめは互いに繋いだ側の手を動かさずとしてやっぱり止めて、次にわざわざ逆の方の手で指差した。

「……」

とは言っても、ただ見ただけで雪の一片が付いて濡れたかどうかなんてのはもちろんわからない。

だから私は溍の傍に近寄り、

「ここ？」

タイヤキ袋を持った手の指先で触れようとして……止めた。

代わりに、さらにもう一歩だけ溍の傍に近寄ると、ほんのちよつとだけ溍の手を引いてから溍の指が指した場所。溍

の頬に、私の頬を近づけた。

「……ん」

間を置かず、澗も同じようにちよつとだけ身体を動かして頬を私へと寄せてきてくれる。

だから最後に、もう一度だけ私から距離を縮めた。そして、触れ合う。

びと

冷たい。

「ココ。雨よりも、なんだか落ち方がやわらかいような感じがしたから」

「ふうん」

きつと澗も、私を感じてるのと同じように感じてるんだろ うなと思った。

§

身体を離して、再び帰り道を歩き出す。

「朝の天気予報でも言ってたしね」

「でも、澗の頬が感じたのなら、天気予報よりも当てになるから」

「そかな」

「うん」

「お姉ちゃんが言ってくれるなら、そうかも」

「そうだよ」

と、私の目の前を白い小さなカケラが横切った。

「あ」

次々に、額と頬と、鼻の上。

多分髪の上にも。

「……雪 降ってる。いっぱい降り始めたみたい。今、こつちにもきた」

「うん」

わたしのところにも

「ほら、やつぱり」

澗の頬は敏感なんだ、やつぱり」

「なんだかえつちな言い方ー、お姉ちゃん、それ」

くすくすと笑いながら

「だって本当でしょ」

いつも澗の頬を触ってるお姉ちゃんと言っただから間違いない

「お姉ちゃんのお姉ちゃんのお姉ちゃんのこと」

「えつちなお姉さんは好きですか？」

「ちーがーうーって！」

もっつ」

くすくすと笑いながら

くすくすと笑い声を重ねながら

こつこつのも、いいかな

こつこつのも、いいよね

私たちは、急ぐことなく帰り道を歩いていった。

手を繋いだまま、ずつとずつと、二人一緒に。

漏
く
お
も
ら
し
く

「全部、全部お姉ちゃんのせいなんだからねっ！
どうしてくれるのよっ！」

わたしは今、お姉ちゃんと対峙している。

ついさっき縄の男（仮名）さんを怒りの零×零×零ショットで粉砕して、そのまま祭壇から続く鳥居の階段を延々下りて、ついに『虚』の場所へと辿り着いた。

そこには、わたしの探していた人がいるはずだったから。
お姉ちゃんが。

「どうするもなにも……いいけど、その格好はどうしたの、
溲」

「こ、これは」
そう、わたしの今の出で立ちは一言で言っただけでも恥ずかしいシロモノで。

洋服の上の部分はいつもと変わらないけれど……その下がスパッツと白いスカートと、それとゴニョゴニョゴニョ……つまり簡単に言うと、スパッツもスカートも履いてなくて、その代わりに紫色の風呂敷のようなものを水着のバレオみたいに撒いているだけの情けない格好だった。

「だって、しょうがないじゃない。」

あの後、お姉ちゃんを探してる時に幽霊さんたちに出会ったのがこしばらく妙に多くなった原因を考えてたら……もしかしたら、その……」

「その、なに？」

「うー。……その……の、あとの匂いが……だからかなあって」

「聞こえない」

「うー、」

「だからあ……のあとの」

「聞こえませーん」

「だからっ！」

お漏らししちゃったあとのおしっここの匂いで気づかれて、追つかげられやすくなってるんじゃないかって思ったの！だから、濡れちゃったスパッツとパンツを脱いで代わりにこの探してきた風呂敷を巻いて、それでしばらく歩いてたんだけど、でもやっぱり絶対に恥ずかしくって無理だっ、幽霊さん達に会うのが多くなってもかまわないからって思っでもう一度取りに戻ったら、無くなっただの！

「じゃあ、その風呂敷の下は、実はノーパ」

「言っちゃダメえ！」

ほんとに、ホントに恥ずかしいんだからね、ホントに恥ずかしかつたんだからあ」

わたしはここに来るまでの屈辱恥辱の様々なできごとを、まるで走馬灯のように思い出していた。

S

だいたい数時間前。

わたしは立花邸で紗重さんに追つかげられている時に、座敷の間で押し入れから飛び出した後行灯についまづいて盛大にすっころんでしまい、そのまま紗重さんにつかまってしまった。

わたし、死んじゃうんだと思っってお姉ちゃんのことを呼びながら気が遠くなって……気づいたら、まだ死んでなくて、

紗重さんの代わりにお姉ちゃんがわたしを心配そうに覗き込んでいた。

ホッとして、布団に寝かされているのに気づくと同時に下半身が妙にスースーするのがわかった。イヤな予感がして見てみると、わたしはスパッツもスカートもパンツも履いてなくて、そこには申し訳程度にタオルっぽいものが掛けられているだけ。

「お姉ちゃん、わたし……ナニコレ？」

「あのね……その」

「お姉ちゃんはとも言いにくそうに口をどもらせる。

「……もしかして」

「あのねっ、ヘンなことあつたんじゃないから、多分っ、絶対っ」

なんとなく、気絶していた間にとつても恥ずかしいことがあつたようななかつたような、妙に身体が疲れるとつうか生気が足りなくなつてつうな、そんな感覚があつた。

「なんだかあそこがじーんとするつうか、もう、やっぱりもしかしてつうか。」

「ヘンなことつて、なんてゆーか、あーえーうー。」

あ、安心して、血の痕なんてなかつたから、だから絶対大丈夫だつて」

その言葉にちよつと安心する。

「でもね……その、血は出てなかつただけで、代わりにね

「……」

「ますます小さくなつていくお姉ちゃんの声。

「お姉ちゃん、お願いだからちゃんと話して。

わたし、大丈夫だから、ね」

「う、うん……」

そのね、私が溲を見つけた時に、溲はお布団で寝ていてね、それで……それでね、その……しちやつてたの」

「なななにをしちやつてたの、かな」

まさかというイヤな予感。

「そのね、その……お漏らし、しちやつてたの」

ぐわん、と頭の中で大きな鐘が鳴つて、何か大切なものが崩れたような気がした。

「お、おもらし」

「スパッツとかスカートとかお布団とか、もうびちよび」

「わーわー、わかつた、わかつたから、お姉ちゃん、もういいからっ」

恥ずかしさのあまり耳を塞いで目を瞑り、お姉ちゃんの声を遮る。

わたしは怖さのあまりお漏らししてしまつたんだと、そのあまりの情けなさに顔から火が出るような思いだつた。

「そ、それでね。」

このままだつたらよくないつて思つて、その、私がスパッツもパンツも脱がせて、お布団も代えてあげたの」

「その……脱がしてくれた、その、ナニは？」

「とりあえずその渡り廊下に干してあるよ、全部、お布団も、スパッツもスカートもパンツも」

「干してつて……」

「よくなかつた？」

「うう……そんなことないけど……あうう、お姉ちゃん、こめんね」

トホホな気分というのには絶対こつこついう時のためにあるんだとわたしは理解した。一生理解したくない種類のものだつたけれど。

オモイビト
その後、お姉ちゃんが干してくれてたスパッツとスカートとパンツを取ってきて、その間にもちよつとヘコむことがあつただけれど、履き直してみたら、やつぱりまだ全然乾いてなくてとっても悲しかった。

『うう、きもちわるいよう』

『溼、ふあいと、だよ』

『しくしく、なんでわたしがこんな目に……』

そしてその後には、もつと悲惨なことが待っていた。

たとえば村人の幽霊さんたちに追い回されてた時にも、
『お漏らしの匂いがするぞ』

『お漏らしの匂いがするわい』

『若い女子の粗相の匂いじゃ』

『お漏らし巫女じゃ』

『お漏らし巫女じゃ』

『西洋腰巻きのお漏らし巫女じゃ』

『なに、西洋腰巻きじゃと』

『きつと学者様に誑かされたにちがいない』

『きつと学者様からもらつたにちがいない』

『なんとふしだらな』

『ほんにふしだらな』

『ちなみに西洋では腰巻きのことをばんつというそうじゃ』

『ばんつ、とな』

『そのばんつと、すばつにつかあとかいいう履物も全部』

『布団といっしょに干されてたそうじゃ』

『つまり今は、ばんつはいてない』

『ばんつはいてない』

『しかもその染みは、まさに大海のようじゃつたそうな』
『わしの聞いたことのある、めりけんがやつてくるという太平洋という海ぐらいに広いそうじゃ』

『なんと恥ずかしい』

『ほんに恥ずかしい』

『うまら恥ずかしい』

『お漏らし巫女を逃がすな』

『逃がしてしまつたら、もしもわしらの村の巫女が、ふしだらきわまりないお漏らし巫女じゃなんて知られてしまつた』

『う』

『村の恥じゃ』

『村全体の恥じゃ』

『村全体の大恥じゃ』

『逃がすな』

『絶対捕まえる』

『恥ずかしいお漏らし巫女を逃がしてはいかんのじゃあ』

なんて言われて。

わたしは、どつしてそんなこと知ってるのよーっ！、わたしはお漏らし巫女なんかじゃなーいっ！、って叫びながら射影機のシャッターを押しまくつて。

うう、なんて不幸。

お姉ちゃんが干してくれてたつて言うパンツとかを取りに立花家と桐生家の渡り通路に行った時にも、また首の折れた女の幽霊さんが出てきて、射影機も持っていないのにどつしよつて思つたら……ちよつどその横に干したままになつてたお布団を見て、

『プ』

つて、笑つて消えていったの。

助かったのはいいけど、悲しいやら、情けないやら。

それに、縄の間で黒澤家のお父さんと戦つて、その最後の時に拾つた霊石をラジオで聞いてみたら。

『……とこでな、言いくいんだがな。』

お漏らしの癖、あれは早めに直さないといかんぞ。

このままでとお嫁にも行けんからな。

お前は小さい頃なかなか粗相の癖が直らなかつたが、今になつてまたその癖がぶり返すとは……わしや、母さんになんと言いつればいいのか。

とにかく、早くなんとかするんだぞ。わしからの最後の忠告だからな。

『……まったく、どうして、ブツブツ……』

もう、あんまりにも情けなくて情けなくて、どうしようもなかつたわよ、あれは！

だいたい八重さん、あなたいつまでおねしょしてたのよ。

(ちなみにその霊石は、その後すぐ床に叩きつけて割つてしまった)

その『お漏らし』の件だけでも恥ずかしいのに、その上こんな格好で、しかもノーパ でなんて……祭壇前の通路の階段下に忌人さんが現れちゃった時なんて、もういつたいてどうすれバインダー状態だったのに……。

§

そんなこんなの迷シーンの数々。

思い出すだけでも恥ずかしくて、また泣きそうになる。

「へえー」

そんなわたしの心を知つてか知らずか、とつても無責任なお姉ちゃんの声。

「ううん、無責任というよりもこれは……。」

「お姉ちゃん、なんだかニヤニヤしてる」

「そんなことないよ。」

大変だつたね、淺

ピンときた。

「お姉ちゃん、でしょ」

「なにが？」

「わたしの干してあつたスパッツとかパンツとか、取つていつたの、やつぱりお姉ちゃんだったんでしょ。」

村人さんたちに連れて行かれたと思つてたら、心配してたのに、実はどこかに隠れてて私が脱いだスキに全部取つていつちやつたんだ」

私はつかつかとお姉ちゃんの近くまで詰め寄る。

「私、やってない」

「しらばつくないですよ！」

「ほんとだもん。」

私、取つてないもん。

お姉ちゃんのこと信じてくれないなんて……お姉ちゃん悲しい。しくしく」

「うう……そうやってまたウソ泣きを」

「本当に私は取つてないのに。くすんくすん。」

だつて、取つてきてくれたのは……」

そう言つて私の後ろを指さす。

振り返り、わたしは「ひつ」と短い悲鳴を上げてしまつた。

ここに入ってきた鳥居の入り口の辺り、そこには信じられないことに、今さっき倒したはずの縄の男（仮名）さんが立っていたから。

……立っていたけど。

その、

頭に被ってる『パンツ』は、いったいナニ？

そして手に持つてる『スパッツ』は？

ああ！ 鼻の前にあてて匂いなんて嗅いでるう！

やーめーてー！（涙目）

「そう、縄の男（仮名）さんでしたー」

泣いてるフリを止めたお姉ちゃんの、本当に楽しそうな声が響く。

「な、な、な……」

「ね、私じゃないでしょ。」

私はただ『溻のパンツを取ってきたら、きつと面白いわよ』ってアドバイスしただけ。

それに、あと、その縄の男（仮名）さんに取ってくるように命令してくれたのはね」

すつと、お姉ちゃんの横に白い着物の女の人の姿が現れる。

紅い染みのついた着物。

目をこらしてよく見る。

……ま、まさか。

「はい、今、この村で一番えらい人。

私のソウル・シスター、双子の姉（妹）萌えのマイフェイバリット同志 黒澤紗重さんです。

ひゅーひゅー、ばちばちばち」

『また逢えたわね、八重』
にっこり。

ナンデ？

瞬間、わたしの頭に紗重さんに捕まっていた時のことが白くフラッシュユバツクする。

あの時、わたしは、わたしは紗重さんに……紗重さんと……お姉ちゃん？

突然。

お姉ちゃんがいつものひよこひよこしたトロロい動きがまったく嘘のような素早さでわたしに抱きついてくる。

同時に、手に持っていた射影機が紗重さんに奪われる。

そのまま身体の向きを変えられて、広くて平らな台座の石に押し倒された。

「いたっ」

「ごちんと頭を打つてしまっつ。」

「ご、ごめんなさい、溻。だいじょつぶ？」

「大丈夫、じゃないわよう、お姉ちゃん」
ちよつと涙目になる。

けど、ハツとして、今はそういう場合じゃないって思い直す。

「じゃなくて、この、このアレな体勢はいったいなんなんですか」
「じゅつ」

「さて、なんなんでしょう」

『さて、なんなんでしょう』

「つて、紗重さんもいるしーっ！」

お姉ちゃんの身の毛もよだつような満面の笑みのすぐ横で、紗重さんもまったく同じ種類の笑顔を浮かべて、わたしの顔を覗き込んでいた。

お姉ちゃんの手が、私の顔を挟み込むように伸びてくる。

私の両手は、冷たい手。多分紗重さんの手に押さえ

込まれて、まったく身動きとれない状態で。

お姉ちゃんの手が頬からゆつくりと滑り降りて、私の首筋に当てられる。

そしてわたしは、一つの可能性に気づいてしまった。

「……お、ねえ、ちゃん……」

ドクンドクンと、いきなりシリアスモードに入ったかのような、でもってシリアスを越えたどシリアスな恐ろしい予感に心臓が早鐘のように鳴り響く。

舌が乾く。

「……わたし……」

わたしは半分泣きそうな震える声で訊ねた。

「わたし……おねえちゃんに……、

お姉ちゃんに……殺されるの？」

「まさか」

『まさか』

「へ？」

「そんなひどいこと、漫にしないよ」

『そんなひどいこと、私にもお姉ちゃんにも、もつする必要はないもの』

「じゃあ一体わたしをどうするつもりなのか、どうやって

漏

『虚』を静めるつもりなのか。別に『虚』を静めるのに協力したいとはこれっぽっちも思っていないんだけど。わたしにはもう全然わからない。

『蘭が教えてくれたの』

「ちよっと座敷牢とかいるいると調べてたら、わかっちゃったの。

別の方法が」

そう言えばお姉ちゃんつて、民俗学とか土着信仰とか魔術とか呪いとかが占いとかがムーとかエトセトラエトセトラに妙に凝ってたなあ。少し前に論文をどこかの秘密結社にどーのどーのとかも言ってた気がするし、この間なんて恋の媚薬の実験台にされかかったり……なんてことをふと思いつく。

「そのパンツがぶつてるボンクラ民俗学者さんなんかには思いもつかなかった方法。ここの民俗信仰と秘儀の記録と、縁のある某秘密結社の方から教えていただいた西洋魔術と私のオリジナル魔術やらなんやら全てを集大成した、画期的かつ効率的かつ萌え萌えで背徳的で淫靡的な。

もつとずつとベターな、いいえ、ベストの儀式の方法よ」

そう言っただけの耳に、生暖かい息を吹きかけた。

なんだか身に覚えのある気がする、生暖かい息。

そくりと、イヤな予感が身体を走る。

「お姉ちゃん……その新しい儀式ってわたしも関係するの

なあ……。

「しないよ、ね」

わたしのすぐるような声に、お姉ちゃんにはこーつと笑みを返してくれた。邪悪な、まさに邪悪としか形容できないような笑みを。

「大丈夫。そのための前準備もちゃんと済ませてるから」

オモイビト

「ま、前準備って？」

「私と、澗と、紗重とで、ちゃんとしたじゃない。ア・レ・
よ」

ああ、知りたくない、聞きたくない。

思い出したくない。

「だって、澗も本当は気づいてたんでしょ」

「だって、八重も本当は気づいてたんでしょ」

「あの時、あの立花邸の座敷で、澗が紗重に襲われて気絶して」

「お漏らししちゃったのは、夢じゃないって。八重は、あいかわらず粗相しやすい身体なんだって」

「夢の中で私たち二人にえっちなことさんざんされて、気持ちよくなって何度も何度もいっちゃって」

「そのあげくにお漏らししちゃったのは」

「本当は夢なんかじゃなくて」

「夢なんかじゃなくて本当にあつたことだって」

「気づいてたんでしょ」

「気づいてたんでしょ」

わたしは二人のその喜々とした告白に、がっくりと力が抜ける。

「うう……やっぱり夢じゃなかったんだ。」

お漏らしもなにもかも、全部お姉ちゃんたちのせいだったんだ……しくしく。
わたしの純潔をかえせえ」
どこかの紅い着物を着た怖がりの女の子のような声で非難してみる。

ね。

……でも、これからすぐに、無くしちゃうけどね」

二ヤリ

「！」

「だから、ちゃんと責任とってあげる」

「だから、ちゃんと責任とってあげる」

「ずっと一緒にいて、責任とってあげるから」

「ずっと一緒にいて、責任とってあげるから」

周りにシャンシャンと錫杖を打ち鳴らす音が響き出す。

「ありがたや」

「ありがたや」

「おお、これぞまさにお漏らし巫女のれずぶれい」

「お漏らし巫女の、れずぶれい」

「れずぶれいの生本番が、新しい儀式がはじまるぞ」

「儀式がはじまるぞ」

「ありがたや」

「ありがたや」

「これで村も安泰じゃ」

「眼福眼福」

「まっこと、寿命の延びる思いがするわい」

眼だけで周りを見渡すと、いつのまにやら大量発生した宮司の皆さんたちが、錫杖フリフリ喜びの踊りを踊っていた。

あ、忌人さん達も混じってる。

パンツがぶつたままの縄の男(仮名)さんも。

「ああ、みんなお姉ちゃんに言いくるめられてるっ」

「お姉ちゃんのこと、見直した？」

「そういう問題じゃ」

「素直じゃないんだから……えい」

『素直じゃないんだから……えい』

「んー！」

お姉ちゃんたちにキスされて

瞬間。

無数の紅い蝶が、一斉にわたしたちの周りを舞い始め

そうして。

幻想的で、どこか滑稽で、おまけにバリバリ羞恥プレイな景色の中。

新しい形の『双子の儀式』が、わたしの上におりてきた。

§

さて。

双子の儀式が成功したかどうかは、最早余人の知る処では

無い。

「ひーん、なんでこうなっちゃったのよー！」

あとがき

こんにちわ、杉本秀昭(suganoh)です。

前回個人誌を出してから早三年……長い、長すぎる空白期間。

……の末に、ようやくまた小さな本を一冊出すこととなりました。

本作は二 三年十一月にテクモから発売されたプレイステーション2用3Dアクションゲーム「零〜紅い蝶〜」の二次創作作品です。

ゲーム本編では、イージー&ノーマル、ハード&ナイトメアでそれぞれの難易度による二種類のエンディングが用意されています。

ネタバレとなつてしましますが、一つ目のエンディング

「紅い蝶」は最後に漣が繭の望み 結局一緒に生き続けることはできないことがわかったから、それなら漣と一つになりたい、蝶となつてずっと一緒にいたい を受けて紅鬃祭を行ってしまうというもので、エンディングテーマ曲「蝶」の演出や漣の最後の叫びなど、不条理さや悲しさややるせなさがないまぜになつた感情がドバツと胸に溢れてくる非常に印象に遺るエンディングでした。おそらく作品としての「零〜紅い蝶〜」のエンディングはこの一つ目の方が正しいのではないかと思えます。

そして二つ目のエンディング「虚」、ノーマルモードをクリアして出現するハードモードでのラストシーンは、演出面でもその「紅い蝶」エンディングに劣ってしまつていますが、その問題提起っぷりにプレイヤーはまたしても啞然然然とし

てしまうのでした。なぜなら、ノーマルモードのラスボス繭の男との戦闘後に出現する真ラスボス、繭&紗重との戦闘時の台詞 拙作「紅い夢の夜」中でも引用させていたように「本当はあのとき崖から落ちたのは、わざとだつて気づいてたんでしょ」等 やスタツフロール後に流れるムービーでの、ダム湖に沈んだ皆神村の景色を眺める二人が失明した漣を促すようにして立ち去るうとする時の繭のソクリとする微かな笑み、「ずっと一緒にだから」の言葉などから、繭の漣に対する狂気にも似た愛情や独占欲を想起させられてしまうからです。

ゲーム本編で語られる双子の姉妹(兄弟)の関係、病弱な妹(明治七年の太政官布告により双子が産まれた場合 旧来は先に産まれた方を弟・妹とする地方もあったが、全て先に産まれた方を兄・姉とするとされた。従つて旧来の流儀に習うなら漣が姉で繭が妹となる)は紅鬃祭により姉と一つになることをなにより望んでいるという至んだ愛情は、そのまま現代に生きているはずの繭にも重ねられるものとなっております。その湿り気を含んだ感情は二つのエンディングどちらでも表現されていますが、「虚」エンディングを観た後でもう一度「紅い蝶」エンディングを観ると、また一味違つた感想が得られるのではないかと思えます。ただどちらのエンディングにしても、繭は「漣と一つになりたい」「漣とずっと一緒にいたい」という願いを叶えられているのがなんと、漣、御愁傷様という感じですね。

このような観点を持つてゲーム最初からプレイしなおしてみれば、最初から感じていた双子姉妹の百合々々しさもさらに倍増するというもの。どのシーンも繭の漣へのアレな感情が透けて見えるようであまりませぬ。

筆者といたしまして、このように美味しいシチュエーション満載であるからにはその煩惱妄想赴くままにいろいろと書いてみたいと考えるのも当然こと。結局、まずは一番楽しそうな「虚」エンディングの流れで、エンディングを補充するようなお話、つまり本書のタイトルとなっている「紅い夢の夜」を書いてみたという訳です。

最初は現在のようなハッピーエンドではなく、皆神村の双子の呪いみたいなものがこれから螺旋のようにずっと続いていくドロドロとした終わり方を考えていたのですが、それはあまりに悲しい気分になってしまったのでボツになり今の終わり方となりました。他の短編についても、そんなドロドロ口とハッピーエンドにしたいという二つの気分をゆらゆらしながら書いていたりします。

ちなみに本書に収録された短編はそれぞれ、

- ・ 昏々たそがれ
 - ・ 紅い夢の夜
 - ・ 類々ほお
- については「虚」エンディングでの後日談となっており、
・ 漏々おもらし
のみ、本編「七ノ刻」からの分岐によるコメディエンディングとなっています。

さて、長々と話してまいりましたが、本書の内容はいかがでしたでしょうか？

藪のどうしようもない程の深い濁への想いはきちんと書いていましたでしょうか。全てを受け入れることのできる濁の強さは表現できていましたでしょうか。まだまだ筆力の足りないことは承知していますが、少しでもこれらの想いが読者

の方々にも伝えることができたら嬉しく思います。

最後になりましたが、「零々紅い蝶々」という作品を世に送り出していたいただいたテクモ 零プロジェクトスタッフ一同様と、いつもウェブページを読んでツツコミを入れていただいている読者の皆様、この場を借りてお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

それではまたいつか別の作品でお会いいたしましょう……
ただし次回がいつになるかはさっぱりですが(笑)。

二〇〇三年十二月三十日

杉本秀昭

二〇〇三年十二月三〇日 初版発行

二〇〇四年〇八月一五日 第二版発行

二〇〇五年〇一月〇五日 第三版発行

発行者 杉本秀昭

発行元 BitMap Publishing

郵便番号 六七三 〇〇〇五

兵庫県明石市小久保二丁目 五 一

吉田建設ビル 四〇二号

頒布元 BitMap Publishing

印刷・製本

杉本印刷

URL <http://homepages3.nifty.com/sugich/>

メール jac02667@nifty.ne.jp

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

頒価は記載されておりませんが、ご了承下さい。

Copyright 2003 株式会社テクモ
Copyright 2005 SUGIMOTO Hideaki Printed in Japan